

熊本方言談話音声収集班 報告書

基盤研究 (B) (一般) 平成 18 年度～平成 20 年度「地方中核都市在住外国人のための方言教材の開発ーその理念の構築と実際」

田川 恭識

(大阪大学大学院 文学研究科)

目次

第1節 本調査の目的	5
1. 1. はじめに	5
1. 2. アクセントが無い方言とは	5
1. 3. 調査の方法	7
第2節 分析の対象とした談話音声の概要	9
2. 1. 対象とした談話音声の発話者	9
2. 2. 談話のテーマ	9
2. 3. 収録の様相	10
2. 4. 音声の書き起こし	10
2. 5. 本報告で用いた談話音声の概要	11
2. 6. 談話中の方言的要素	12
2. 6. 1. 話者 FHE の談話音声	12
2. 6. 2. 話者 FOM の談話音声	13
2. 6. 3. 話者 MTS の談話音声 (DB)	15
2. 6. 4. 話者 FMK の談話音声	16
2. 6. 5. 話者 MTS の談話音声	17
2. 6. 6. 話者 MBT の談話音声	18
2. 7. 談話音声の特徴	19
第3節 熊本方言の音調	20
3. 1. 平山輝男氏、秋山正次氏による論考	20
3. 2. 前川喜久雄氏による論考	21
3. 3. 郡史郎氏による論考	22
3. 4. 語レベルの音調の独立性	23
3. 4. 1. 修飾・被修飾関係にある語の音調	23
3. 4. 1. 1. 形容詞動詞＋名詞	23
3. 4. 1. 2. 形容詞＋名詞	26
3. 4. 1. 3. 「爺」類の名詞の音調	28
3. 5. 「昇降調」	29
3. 6. ここまでの考察	31
3. 7. 方言的要素の音調	32
3. 7. 1. 引用の「テ」の音調	32
3. 7. 2. 「ケン」の音調	34
3. 7. 3. 「ネ」の音調	36
3. 7. 4. 「ト」の音調	37
3. 7. 5. 助動詞「タイ」の音調	39
3. 7. 6. 終助詞「ヤ」の音調	42
第4節 まとめと今後の展望	44
参考文献	45

図目次

図 1	収録の模式図	10
図 2	書き起こし作業の例	11
図 3	熊本方言の韻律構造（前川 1997 より抜粋）	21
図 4	話者 FOM による音声	24
図 5	話者 FOM による音声（DB）	25
図 6	話者 MTS による音声（DB）	26
図 7	話者 FHE による発話	26
図 8	話者 FMK による発話	27
図 9	話者 FMK による音声	27
図 10	昇降調の例（「隣の爺さん家に」話者 MBT）	29
図 11	話者 MBT による昇降調の例	31
図 12	話者 FOM による「テ」の音調	32
図 13	話者 FHE による「テ」の音調	33
図 14	話者 FOM による「テ」の音調	33
図 15	話者 MTS による「テ」の音調	34
図 16	話者 MTS による「ケン」の音調	34
図 17	話者 MTS 「ケン」の音調	35
図 18	話者 FOM 「ケン」の音調	35
図 19	話者 FMK 「ケン」の音調	36
図 20	話者 MTS による「ね」の音調	36
図 21	話者 FOM による「ネ」の音調	37
図 22	話者 MTS による「と」の音調	38
図 23	話者 FHE による「と」の音調	38
図 24	話者 FHE による「ト」の音調	39
図 25	話者 FOM 「タイ」の例	40
図 26	話者 FOM による「タイ」の音調	40
図 27	話者 MTS による「タイ」の音調	41
図 28	話者 FOM による「タイ」の音調	41
図 29	話者 FMK による「タイ」の音調	42
図 30	話者 MTS による「ヤ」の音調	43

表目次

表 1	談話参加者	9
表 2	談話音声の概要	12
表 3	方言的要素の例	12
表 4	話者 FHE の談話における方言要素	13
表 5	話者 FOM	15
表 6	話者 MTS	16
表 7	話者 FMK	17
表 8	話者 MTS	17
表 9	話者 MBT	18
表 10	名詞「爺」類の音調	29
表 11	話者ごとに見た昇降調の出現数	30

第1節 本調査の目的

1. 1. はじめに

日本語の諸方言を音調の観点から見渡すと、東京方言や京阪方言に代表されるように、多くの方言が「アクセント」を持つとされる。しかし、アクセントが「無い」と言われる方言の存在についても古くから報告されている。本報告で述べる熊本方言¹についても、従来アクセントが無いとされてきた。これまで、日本語諸方言の音調に関する研究は膨大な蓄積があるが、その多くがアクセントの「ある」方言を対象としたものであり、またその諸研究の中心的関心は対象方言のアクセント体系の記述にあったように見受けられる。これに対し、アクセントが無い方言の音調に関する研究は、質・量ともにいまだ十分な蓄積があるとは言えない状況にある。以上を踏まえ筆者らは、アクセントが無いとされる熊本方言を対象にその音調の実相に迫ることを目的とし、継続的な調査を行っている。本報告ではそのための前段階であるデータの収集方法と、収集したデータに基づく予備的な分析の結果について概観する。

1. 2. アクセントが無い方言とは

報告の具体的な内容に入る前に、そもそも「アクセントが無い」とはどういうことか、改めて確認しておく必要がある。これらの方言について詳細に言及した初期の研究として、平山輝男氏による一連の論考が挙げられるであろう。以下は、平山輝男（1940）の一節である。

例えば「ハ シ」と頭高に発音して「箸」を思い、「ハ シ」と尾高（下上）に発音して「橋」を感じ、これを前の「箸」と区別しているのは東京地方等の発音習慣を持つ人である。こうしたアクセントの上の習慣によって同音異議の語をいい分けるのは二音節語に二種以上のアクセントの型があるからである。（中略）

地方によると名詞も動詞も形容詞も皆揃って区別がなく、従って「箸」と「橋」、「花」と「鼻」、「雨」と「飴」、「川」と「皮」、「柿」と「垣」と「牡蠣」、「着る」と「切る」、「振る」と「降る」、「腫れる」と「晴れる」、「暑い」と「厚い」等のような同音異議の語は素より他の総ての語をアクセントによって区別する事のない所がある。（平山 1940）²

以上に示されているように「ハシ」という音連鎖は複数の概念を指し、分節的特徴のみからはどれを指しているのか特定できない。このような場合、アクセントがある東京方言の場合、「ハシ」という音連鎖において、高さの違いにより同音異議語の区別を行う。分節的特徴はおなじであるが、高さの変化パタンの異なりによって語が区別されるわけである。しかし本報告での熊本方言などでは、名詞を始め、動詞、形容詞においてアクセントによる語の区別が行われない。平山氏はこのような特徴を持つ方言を「一型アクセント」方言と呼んでいる。

このような特徴を持つ方言について別の呼称を用いるべきとする論考も見られる。柴田武（1961）は、アクセントによって語を弁別しない方言について、以下のように述べている。

¹ 我々の調査では、便宜的に熊本市およびその周辺地域で日常的に用いられている方言を「熊本方言」と位置づけた。従ってここでの「熊本方言」とは熊本市内及びその周辺地域の方言を指す。

² 適宜、現代語の表記に改めた。以下の平山氏の引用部分も同様である。

この方言では、語に一定のアクセントがない。文字に書いた語を続けて読むと、一般に平ら（●●●または○○○）になるが、実際に話をするときには、同じ語がある場合には●○○、ある場合には○●○、また、ある場合には○○●のようであって、高の部分が安定していない。（柴田 1961）

柴田氏は、当該方言においてはアクセントによって語を区別することは無く、そのため「無アクセント」という呼称が適当としている。

ここで「一型アクセント」と「無アクセント」との違いが問題になるところであるが、どちらも「音調によって語の弁別を行わない」という点では一致しているようである。つまり、どちらの用語も「アクセントによる弁別機能が無い」という認識に基づいており、「無アクセント」とはその「弁別機能が無い」ということに焦点を当てた表現と考えられる。これに対し、「一型アクセント」という呼称は、アクセントの弁別性と併せて語あるいは文節がもつ固有の音調型について注意が向けられているようである。このことについて平山（1937a）では次のように述べている。

これは俗に無アクセント等と呼ばれるものである。然しどんな調子に発音してもよいと云うのではなく、自らそこにはきまりがある。即ち同数音節からなる語が同じ条件のもとに発音される時は常に同じ型が現われる。こうした地方の特徴として、他の型の数の多い地方よりも割合に或る型を中心として微かな動きが認められるが、矢張り一つの型の存在は否定できない。これを便宜上一つの型のアクセントと呼んでおく。（平山 1937a）

以上から「一型アクセント」という呼称は弁別機能が無いことと併せて音調の型に焦点を当てた呼称であることが窺える。では平山氏の「一型アクセント」を「無アクセント」とすべきとした柴田氏が音調の型について全く意識していなかったかということそうではない。柴田氏は、柴田（1961）の中で平山氏の「一型アクセント」について「一型アクセント」という名は「型が一つある」という意味だから、むしろ、都城市方言のように、すべてのアクセント節が一つの型しか持たない方言に与えるべき名だとも述べている。

確かに「すべてのアクセント節の最後のモーラがいつも高い」という都城市方言は、他の一型アクセント方言と比べると安定した型を持ち、両者は異なる性質のものであるという見方は妥当と言えるかもしれない。しかし「無アクセント」と「一型アクセント」を分ける考えに対して、山口幸洋（1998）では次のように述べている。

都城方言と熊本、仙台等の方言とが、そのようにして大分類されるほどに差があるかについては疑問がないわけではない。私は何より、都城、熊本、仙台その他いずれもその実態はそれほど分かっていないということを指摘したい。その実態、本質がよく知られないまま、レッテルにこだわっているのではなからうか。（山口 1998）

山口氏は、従来言われている都城市方言も含めた「一型アクセント」方言の音調については、未だ精査されているとは言えず、そのような段階で「無アクセント」と「一型アクセント」を分離することに対して懐疑的な姿勢を示している。山口氏自身は、当該方言ではアクセントによって語を弁別しないという性質に注目するならば、「無弁別アクセント」という名称も考えられるが、これ以上の名称の乱立

は避けるべきとして「一型アクセント」の名称を用いている。以上からアクセントが無い方言をどのように捉えるべきかということについては、定まった見方があるとは言えない状況にある。そしてこのような問題は未だ解決されておらず、現在にも引き継がれていると問題と言える。

以上のような状況の中、近年になってアクセントが無い方言をどのように捉えるべきか、という問題を検討する上で興味深い研究が行われるようになった。その中でも特に注目されるのが、前川喜久雄氏による熊本方言を対象とした一連の研究である。そのうちの前川喜久雄（1997）では、「無アクセント方言は語のピッチ・パタンに関する決まりが無い」としながらも、「無アクセント方言に存在しないのは語レベルでのピッチ指定であって、語より上位の言語分析レベルにおいては言語学的なピッチ制御が行われていても何ら不思議が無い」としている。そして熊本方言のイントネーションについて分析を行い、当該方言におけるイントネーション規則を提示している。前川氏の熊本方言のイントネーション規則は、Pierrehumbert らの韻律理論に基づいており、H・L トーンの結合規則によって記述される。前川氏による一連の研究から得られた知見は熊本方言の音調を考える上で示唆に富むが、一方で「無アクセント」方言では語レベルの「ピッチ・パタンが無い」という前提については疑問もある。

このような疑問に対し、郡史郎氏は熊本方言の音調について前川氏と同様の手法を用い、さらに多くの検討項目を加えて熊本方言の音調について分析している（郡史郎 2006）。その結果、熊本方言には語あるいは語レベルで音調の型が存在するがその型は安定していないことを踏まえ、このような方言を「非定型アクセント」としている。郡氏の知見は、これまで「一型アクセント」・「無アクセント」とされてきた方言の捉え方について、再考の必要があることを具体的なデータに基づいて示している。

1. 3. 調査の方法

以上のように「一型アクセント」「無アクセント」方言についての研究は、様々な角度から行われるようになり、興味深い知見も多数得られている。しかし、「無アクセント」「一型アクセント」方言においてはまだまだ不明な点も多く、研究の方法論についても検討の余地があると考えられる。ここまでの先行研究を踏まえ、特に検討の余地があるのは以下の点であると思われる。

- ・従来の、いわゆる「読み上げ調査」等の研究方法の不自然性
- ・音声資料の品質

従来、方言音声の研究において、いわゆる調査語リストを元にした「読み上げ」による調査が多く見られる。その理由として、対象とする方言音声のアクセント体系を明らかにする上で、「読み上げ調査」は効率的かつ有効であることが挙げられる。しかしながらそのような調査の方法に対しては、自然性という観点から批判的な意見も見られる。山口幸洋氏は、自身がアクセント調査のインフォーマントになった際の経験を次のように語っている。

「駅前にあった商人宿の一室で、私は芳賀さん³から、私自身のアクセント調査をしてもらった。私は自分の新居方言には絶対の自信を持っていた。いついかなる場面でも、正統なアクセントで話せると思い込んでいた。ところがいざ調査されるとなると、そうはいかなかったのである。調査されて

³ 芳賀綏氏のこと。

いるという意識があるので、文字を読み間違えてしまったくらいであった。一度、読み間違うと、今度こそは間違うまいという気持ちになり、さらなる緊張を呼び起こしてしまった。

読み上げ調査は全面的に信用してはいけない。このときの経験も、方言の自然観察の重要性を再確認する機会であった。読み上げに加えて、自然会話を行う必要性を強く認識するようになった。」

(山口幸洋 2002)

以上の山口氏の経験は、調査という状況がどれほどインフォーマントに心理的負担を与えるか、そしてその心理的負担が音声の生成にも影響を与え、結果として信頼性に疑問のある音声が生産されてしまう可能性があることを示唆している。

以上はアクセント調査のみならず、イントネーションの調査においてもある程度共通しているのではないと思われる。以上で述べたように、近年「一型アクセント」「無アクセント」方言の音調についての研究は進展を見せ、興味深い知見が報告されている。しかしそれらの多くは研究者側が調査文を用意し、それらをインフォーマントが読む、もしくは自分の方言に訳して言う、といった手法によって収集された音声を対象としたものであった。このような手法は、当該方言の音調の規則などに関する仮説を得るためには必須であるが、自然談話でも同様の結果が得られるのかという疑問も生じる。

以上を踏まえ、我々の調査では以下のような目的に基づいて音声資料の収集を行った⁴。

- ・ いわゆる、読み上げ式調査や例文の発話といった、特殊な環境下における音声資料ではなく、できるだけ自然の会話に近い音声資料を収録する。
- ・ その際、音響分析に耐え得るような高品質の音声を収録する。

コンピュータ上で音声分析ソフトを用いて分析を行う場合、何より重要となるのが音声分析に耐えうるような品質の良い音声を得ることである。例えば、談話音声中出现したある発話のイントネーションパターンを見ようとする場合に、対象区間に雑音などが含まれていると F0 (Fundamental Frequency) 値の算出に失敗することがある。あるいは算出できたとしても、その値が間違っている場合がある。そのような問題点を回避するためには、ノイズの混入を出来るだけ回避する必要がある。そこで本報告では防音構造のスタジオ等、出来るだけ外部雑音の混入しない静謐な部屋で収録を行い、さらにヘッドウォーン型マイク及び半導体型録音機を使用することでノイズの混入を可能な限り避けた。次節では本報告での録音方法及び分析の手順について述べる。

⁴ その他、談話音声を用いた研究として吉岡泰夫・都染直也 (1993) などを参照。

第2節 分析の対象とした談話音声の概要

2.1. 対象とした談話音声の発話者

本研究では、熊本市内を主な成育地とする 20 代の話者を対象に談話音声の収集を行った。収録した談話の音声数は計 15 談話で、そのうち本報告書で分析の対象としたのは、「KD2.WAV」、「KD4.WAV」、「KD3.WAV」の談話である。以下では、便宜のために、「KD2.WAV」を「DA」、「KD4.WAV」を「DB」、「KD3.WAV」を「DC」と呼ぶ。本研究では、談話参加者の関係を「親」と「疎」で捉え、参加者同士が友人もしくは知人の場合を「親」とし、初対面もしくは顔見知り程度の場合を「疎」とした。同一の話者で「親」の条件と「疎」の条件の談話を収録することによって、方言的要素もしくは方言的音調の出現に傾向差があるかについて見るためである。本報告で対象とした談話の発話者は女性 3 名、男性 2 名で DA と DB は親条件の談話、DC の談話は疎条件の談話である。DB と DC の話者 1 名は同じ話者であり、親条件と疎条件で相手を変えて行ったものである。

表 1 談話参加者

談話	話者	年齢(当時)	性別
DA	FHE	24 歳	女
	FOH	24 歳	女
DB	MTS	20 歳	男
	FMK	21 歳	女
DC	MBT	22 歳	男
	MTS	20 歳	男

2.2. 談話のテーマ

談話の収録にあたっては、いくつかの方法が考えられる。そのうちの一つは、話者同士によって自由に談話を展開していくもので、「自由談話」と呼ばれることもある。また、調査者から話題を与え、それをテーマに会話することを依頼するという方法もある(久木田恵 2002)。これらの方法は、「自然な談話」が得られるという点で有益な方法であるが、(1) 口数が少ない談話参加者の場合、極端に発話数が少なくなる、(2) 談話が自由に展開されるが、反面、内容の統制がとれない、などの問題も挙げられる。これまでの談話研究では、以上のような「自由談話」もしくは「話題提供」という手法に則ったものが主流であったが、近年では何らかのタスクを会話参加者に与え、そのタスクの遂行過程の音声を録音するケースが見られるようになった。それらのうち、代表的なものとして『日本語地図課題対話コーパス』や『日本語話し言葉コーパス』中の「課題指向対話」などが挙げられる。本研究では、以上に挙げた「自由談話」及び「話題提供」の手法の問題点を考慮し、タスク指向型の談話を収集することとした。

本研究で設定したタスクは、『花さか爺さん』、『三枚のお札』、『耳なし芳一』といった、世間で一定の知名度を持つ童話について、それぞれの話の内容を談話参加者で再現するというものである。談話参加者の多くは、タスクシートに挙げられている昔話のタイトルは知っているものの、個々の話の内容について完全な知識を持っている者はいなかった。そのため収録にあたっては、それぞれの話について

談話参加者が持っている断片的な知識をつなぎあわせながら、個々の話の内容を復元していくという流れをたどることになる。収録時、調査者側からのタスクに関する情報提供はなく、またどのような内容の談話をせよ、という指示も原則として行われなかった。

2. 3. 収録の様相

音声の収録のほとんどは、熊本市内にある大学のスタジオで行われた。録音の様相について図1に模式図を示す。スタジオ内にはモニター室と録音室があり、2つの部屋は壁で仕切られているが、壁の一部はガラス張りになっており、モニター室から録音室の様子を見ることができる。

話者は録音室内にある椅子に腰をかけ、ヘッドウォーン型マイク（コンデンサー型鋭指向性マイク）を装着し、会話を行った。マイクは鋭指向性であるため、装着している話者の音声を中心に拾い、相手の音声はほとんど入らない。収録の間、調査者Aは話者から見えないようにスクリーンを挟んで座り、ヘッドホンでモニタリングしながらミキサーで録音音声をコントロールした。ミキサーには半導体型録音機が繋がれており、ミキシングされた音声を録音した。また音声の録音に加え、話者から目立たない位置にビデオカメラを設置し、会話の様子を録画した。調査者Aはスクリーンを挟んでいるため、話者の様子は見えないが、ビデオカメラの液晶パネルによって観察が可能であった。調査者Bは収録の様子をモニター室から観察し、談話収録中の特記すべき事柄について記録を行った。モニター室の明かりを消し、収録スタジオからモニター室の様子は窺えないように配慮した。

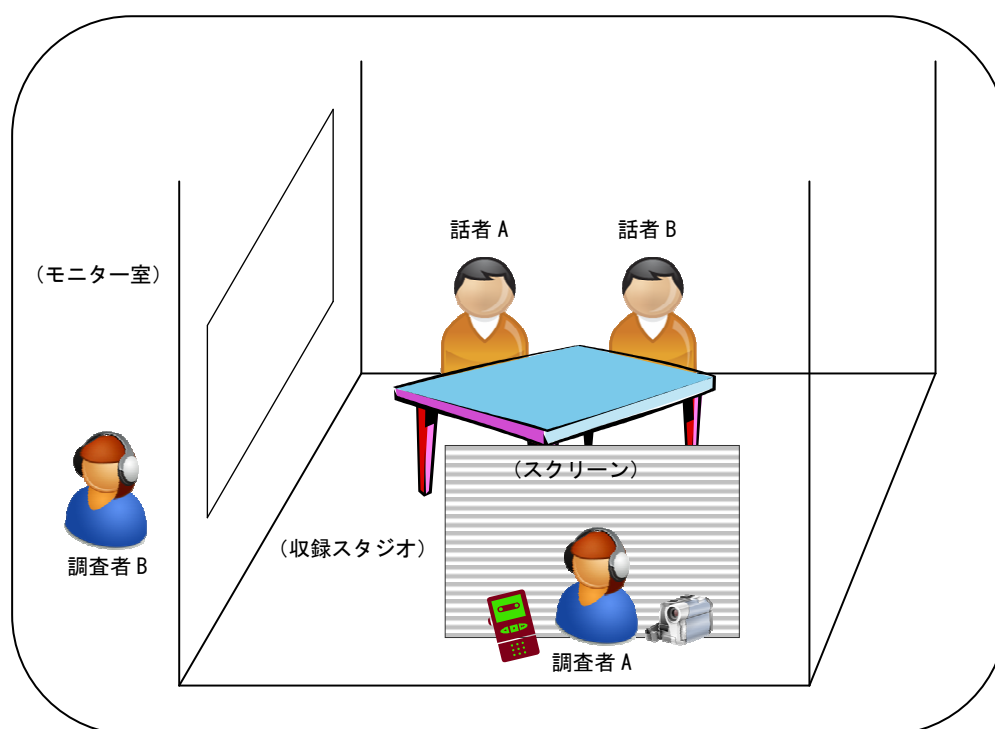


図1 収録の様相図

2. 4. 音声の書き起こし

録音した音声の分析に先立ち、音声の書き起こしを行った。本調査では書き起こし作業において、フリーウェアである”MultiTrans”を用いた。MultiTransの特徴の1つとして、複数チャンネルの音声

に対応していることが挙げられる。本研究では、被調査者一人ずつにマイクを装着し、各話者の音声を L チャンネルと R チャンネルとに振り分け録音を行った。MultiTrans では、このような複数チャンネルの音声データを分離し、それぞれを独立して書き起こすことが可能である。そのため、発話の重複部分も話者ごとに分離して書き起こすことができ、重複部分の書き起こしの正確性が増す。MultiTrans で書き起こしたデータは、LCF 形式か XML 方式で保存でき、テキストエディタで閲覧・編集が可能である。図 2 に MultiTrans での書き起こし作業の画面を示す。画面の上部が文字を入力する部分であり、その下の 2 層に別れた部分には波形が表示される。上段には Speaker1 (R チャンネル) の音声波形、下段は Speaker2 (L チャンネル) の音声波形で、任意の長さの波形を選択し、繰り返し聞くことが出来る。

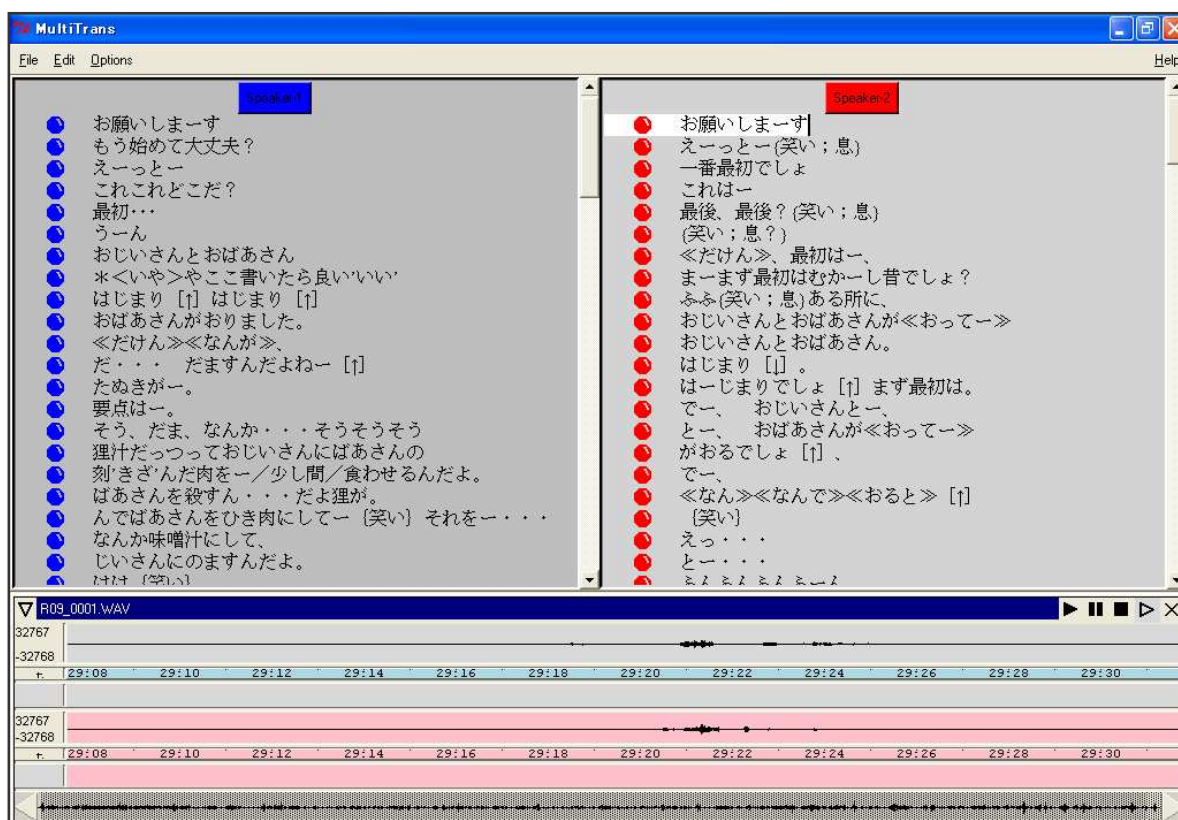


図 2 書き起こし作業の例

2. 5. 本報告で用いた談話音声の概要

本研究で収録、書き起こしを行った音声の概要について表 2 に示す。談話 DA の時間は 24 分 33 秒であった。話者 FHE の音声の書き起こし字数は 1535 字、これに対し話者 FOH の音声の書き起こし字数は 3486 字であった。書き起こし字数を発話量の目安の 1 つと考えると、両者の発話量は単純に見ても倍以上の開きがある。このような話者間の発話量の不均衡は談話 DB、DC でも同様に見られるが、中でも特徴的なのが話者 MTS である。話者 MTS は DB と DC の談話に参加しているが、両談話を比較してみると、DB では相手の倍以上の発話量であるのに対し、DC では相手の半分以下の発話量に収まっている。その原因のひとつには、談話の相手との関係の違いが考えられる。談話 DB における話者 MTS の相手は旧知の友人であるが、談話 DC での相手は初対面で、なおかつ MTS よりも年齢が上の男性である。談話 DB では MTS が会話の主導権を握っているのに対し、DC では MBT への遠慮から会話の主導権を放棄し、そのた

め発話量が減ったものと考えられる。

表 2 談話音声の概要

談話	話者	時間(分)	書き起こし字数
DA	FHE	24.33	1535
	FOH		3486
DB	MTS	21.1	4126
	FMK		1939
DC	MBT	25.3	5058
	MTS		2185

2. 6. 談話中の方言的要素

収集した談話音声の特徴を掴むため、談話音声の中に見られた熊本方言に特徴的な表現、言語形式、語法について注目し、抽出した。以下、本報告ではそれらを「方言的要素」と呼ぶ。方言的要素の抽出に際しては、肥筑方言（肥前（佐賀・長崎両県）と肥後（熊本県）、筑前・筑後（福岡県）の方言）話者である筆者の内省と、先行研究（馬場良二（2005）、秋山正次（1988）、陣内正敬（1996）、秋山正次・吉岡泰夫（1991）等）を参照し行った。例としてDBの談話の一部を以下に抜粋する（表3）。カタカナで記されている部分が方言的要素である。

表4から表9に、話者ごとに見た談話音声の中の方言的要素を示す。表中、「項目」とあるのが観測された方言的要素、「共通語」とあるのは、共通語に変換した場合に近い表現である。また観測された方言的要素を文法的なカテゴリーで分けたものが「分類」であり、一番右にはそれぞれの方言的要素の出現数を示している。

表 3 方言的要素の例

B: あ こう 狭かったト？ あーん ふふふふ
A: そそそそ だケン こう エライ 回ってこられてー、
A: なんか すぐに 追いつかれてー、
B: うん
A: シタラ 三枚目にー なんか、 牛？ 「牛を 出してくれ」って 頼んでー、
B: うんうん

2. 6. 1. 話者 FHE の談話音声

表4に示した話者FHEの場合、談話音声に現れた方言的要素の合計は22で、そのうち否定辞の「ン」が最も多数を占めている。否定辞「ン」は熊本方言では「分からン」「知らン」のように共通語の「ない」に相当する形式として使用される。

否定辞「ン」に続いて出現数が多いのが助詞の「ト」である。熊本方言における「ト」は文末で用いられ、疑問の意味を表すことがある。意味の上では共通語における「の」と近く、話者FHEでも「どう

なるト? (どうなるの)」や「やってたんじゃないト? (やってたんじゃないの)」のように疑問で用いられる例が見られた。

続いて女性が使用する自称詞「ウチ」に複数を表す「ラ」がついた「ウチラ」が、また義務「～なければならない」の意味を表す「ナン」も同数出現している。ここでは、「ウチラ的にはこれを言わナントじゃないト? (私たちの的にはこれを言わないといけないんじゃないの?)」のように用いられていた。

続く引用の助詞「テ」は共通語では「～って」のように促音を伴うが、熊本方言では「枯れ木に花を咲かせましょ」テ言うやつ? (「枯れ木に花を咲かせましよう」って言うやつ?)」のように促音を伴わない(馬場 2005)。続く形式名詞の「ナン(何)」は、共通語で「なに(何)」に相当する。熊本県下の方言で優勢なナ行音の撥音化現象である。また「よく」の音便形である「ヨウ」、進行相を表す助動詞「ヨル」、「の」の音便形「ン」が各1例観測された。

表 4 話者 FHE の談話における方言要素

項目	共通語	分類	出現数
ン	ない	否定辞	8
ト	の	終助詞	5
ウチラ	私達	自称詞	2
ナン	～なければ	助動詞	2
テ	って	助詞(引用)	1
ナン	何	形式名詞	1
ヨウ	よく	音便	1
ヨル	～ている	助動詞	1
ン	の	音便	1
			合計 22

2. 6. 2. 話者 FOM の談話音声

続いて、表 5 は話者 FOM の談話音声に見られた方言的要素である。最下段の合計数を見ても、話者 FHE の談話音声に現れた方言的要素は倍以上であり、また話者 FHE よりも種類が多い。話者 FOM の方言的要素のうち、話者 FHE の音声にも見られたのは否定辞「ン」である。また助動詞「ナン」、および引用の助詞「テ」も話者 FHE の談話音声に見られた方言要素である。

出現数で見ると、最も出現数が多かった方言的要素は否定辞の「ン」である。そして、2 番目に出現数の多い終助詞「タイ」は先の話者 FHE の音声では見られなかったものである。秋山(1988)では、熊本方言では、共通語文法での断定終止法(共通語文法)が存在しないに近いとし、その代わりとして断定辞(ダ・ジャ・ヤ)を零記号にして、「タイ」・「バイ」・「ナー」・「ネー」などの終助詞によって終結することが基本の一つとなっているとしている。また、この「タイ」が零記号断定辞の代行として用いられた場合、「二十ニワ 四タイ」といえば算数計算の冷静な判断・断定の気持ちに近い表現になる⁵。

⁵ 本報告との関連でいえば、テキスト班の和田礼子氏の報告を参照。

続いて助詞の「ツ」であるが、話者 FOM の音声では、「やまんばだったツたい（山姥だったんだよ）」、「気づいたツたいね（気付いたんだよね）」、「殺されるツたいね（殺されるんだよね）」、「咲くツたいね（咲くんだよね）」、「もらうツたい（貰うんだよね）」のように用いられている。秋山・吉岡（1991）による談話資料では、「交渉ばぶちこわすとは、モマカシモンて言うてかり、こけもおるもんな。誰っちや言わんばってん、アゴンオオカツがおっとたい。人ん気にいらんこつばかり言うやつなあ。」のような発話が見られる（下線部筆者）。熊本方言の準体助詞「ト」が変化したものと考えられる。

続く終助詞の「ケ」は共通語の場合、形容動詞の終止形、助動詞「ダ・タ」の終止形で終わる文末に促音を伴って接続する。話者 FOM で観察された「ケ」は「じゃないっケ」、「繰るんじゃないっケ」、「あるっケ」、「違うっケ」のように、形容動詞の終止形にも助動詞「タ・ダ」の終止形にも接続せずに用いられている。

続く「シタラ」は共通語の「そしたら」あるいは「そうしたら」に相当するが、話者 FOM の発話に「そしたら」あるいは「そうしたら」の形式は出てこない。また、その下の「ダケン」、さらには「ケン」は、前者が共通語の「だから」、後者は同じく「から」の意味を表す接続詞・接続助詞である。その 2 つ後の「バ」は共通語の「を」に相当する格助詞、続く「ン」は共通語の助詞「に」に相当する助詞で、ここでもナ行音の撥音化により「調子ん乗って・・・」のように用いられている

次の「オル」は、「殿様がオル時って・・・」や「(鬼が) オッて・・・」のように、生物の存在を表す動詞である。その下の「チョウ」は「ちょっと」の縮約形と考えられる。

続く「～キル」は可能表現で「食べキル（食べることが出来る）」のように用いられる。熊本方言には他にも伝統的な可能表現として「～ユル」という形式も存在するが、本調査の音声資料には出現していない。その下の「クル」は、共通語の「行く」の意味で用いられる動詞、続いて「ヨル」は動作の進行相、「トル」は結果相を表す助動詞である。最後の「ナンサマ」は「とにかく」の意味を表す副詞である。具体的には「ま、ナンサマやってみようか（ま、とにかくやってみようか）」のように使われている。

表 5 話者 FOM

項目	共通語	分類	出現数
ン	ない	否定辞	12
タイ	~だよ	終助詞	8
ツ	の	終助詞	7
ケ	つけ	終助詞	5
シタラ	そしたら	接続詞	4
ケン	から	接続助詞	3
ダケン	だから	接続詞	3
バ	を	格助詞	3
ナン	なければ	助動詞	2
ナン	何	代名詞	2
ン	に	格助詞	2
オル	いる	動詞	2
チョウ	ちょっと	音便	1
キル	できる	助動詞	1
クル	行く	動詞	1
テ	って	助詞(引用)	3
トル	ている	助動詞	1
ナンサマ	とにかく	副詞	1
ヨル	~ている	助動詞	1
ヒッツケル	くつつける	動詞	1
	合計		63

2. 6. 3. 話者 MTS の談話音声 (DB)

話者 MTS の談話 (DB) 音声に表れた方言的要素は計 84 例であり、先の 2 名よりも多い。それらの方言要素のうち、ほとんどは話者 FHE、FOM の談話音声にも表れているが、話者 MTS の音声で始めて表れた方言的要素も散見される。

そのうちの 1 つである「エライ」は副詞で、話者 MTS の談話では、「(踊りが) エライ上手くて・・・(とても上手くて)」のように用いられている。

続いて、2 例見られた「ヤ」は疑問を表す終助詞である。話者 MTS の談話音声では「そうヤ」、「まじ(本当)ヤ」のように使われている。

次の「ウツ」は「叩く」の意味で、談話の中では「(やまんばが蚊に化けたところを) 和尚さんにはちゃんと、ウタレて死んでしまうという話」のように使われている。

続いて「ダロ」は推量の助動詞で、共通語の「だろう」とは異なり語末の母音が短い。「なんか良いもんが出てきたんだろ？」(話者 MTS) のように用いられる。また、確認の際に「ダロ？」のように単独で用いられる場合もある。

表 6 話者 MTS

項目	共通語	分類	出現数
トル	~ている	助動詞	13
タイ	~だよ	終助詞	13
ン	ない	否定辞	9
ツ	の	終助詞	9
テ	って	助詞(引用)	9
ト	の	終助詞	8
ダケン	だから	接続詞	6
エライ	とても	形容詞	4
ケン	から	接続詞	3
ヤ	か	終助詞	3
シタラ	そしたら	接続詞	2
テ	よ	助詞(非引用)	2
ウツ	叩く	動詞	1
ダロ	~だろう	助動詞	2
ナン	何	代名詞	1
バイ	~だよ	終助詞	1
合計			84

2. 6. 4. 話者 FMK の談話音声

次に話者 FMK の音声である。話者 FMK の談話音声で確認された方言的要素は 52 例であった。そのうち多くはこれまで先の 3 名の談話音声でも見られたものである。話者 FMK においてもやはり、否定辞「ン」、「ツ」、「タイ」、「テ」などの出現数が多い。先の 3 名の話者に見られなかった方言的要素は副詞の「ヨウ」、推量の形式である「ジャ」、同じく「チャ」である。副詞「ヨウ」は「ヨウ分からん（よく分からない）」という文で使われている。また、「ジャ」は「曖昧になるけんジャ？（曖昧になるからじゃない?)」、「(前略)「偉い君にはご褒美だよー」チックなものジャ？（「偉い君にはご褒美だよー」チックなものじゃない?)」のように用いられている。続いて「チャ」は、「落ちたっチャ？（落ちたんじゃない?)」、「誰かに持って来られたっチャ？（誰かに持って来られたんじゃない?)」のように用いられている。

また、話者 FMK の談話音声においても疑問の終助詞「ヤ」が「他もう 1 個しかないじゃねーヤ」（他にはもう一個しかないじゃないか）という発話で用いられている。熊本方言の疑問を表す終助詞には「ト」「ナ」「ヤ」などがあり、それぞれ丁寧さによって使い分けが行われる。そのうち、「ヤ」は主に目下に用いられるが（吉岡泰夫 2002）、ここでは話者同士が気の置けない友人同士であるため、使用されたと考えられる。

表 7 話者 FMK

項目	共通語	分類	出現数
ン	ない	否定辞	11
ツ	の	終助詞	5
タイ	～だよ	終助詞	5
ト	の	終助詞	5
テ(引用)	って	助詞	4
ケン	から	接続詞	3
ヨル	～ている	助動詞	3
シタラ	そしたら	接続詞	2
ダケン	だから	接続詞	2
テ	って	助詞(引用)	2
トル	～ている	助動詞	3
ヨウ	よく	副詞	1
ジャ	じゃない?	助動詞	2
ダロ	だろう	助動詞	1
チャ	では	助詞	2
ナン	なの	助動詞	1
ヤ	か	終助詞	1
合計			53

2. 6. 5. 話者 MTS の談話音声

続いて談話 DC の談話における話者 MTS の結果を見ると、約 26 分の談話の中で出現した方言的要素はわずか 1 例であった。書き起こし文字数でも述べたが、談話 DC における話者 MTS の話し相手は初対面であり、なおかつ自分よりも年上の男性である。一方、談話 DB での話し相手（話者 FMK）は話者 MTS の友人であった。DB における話者 MTS の談話音声の書き起こし字数は 4126 字に対し、DC では 2185 字と 2 分の 1 ちかく少なかった。書き起こし字数を発話量の大きな目安として見ると、友人との談話では発話量が多く、率先して談話をリードするのに対し、親密度の低い目上の話者には遠慮して発話を控えていることが窺える。また、それは方言的要素にも反映されており、友人同士の談話では砕けた普段の話し言葉が使われるが、改まった場面では方言的要素の使用を控える傾向が見られる。

表 8 話者 MTS

項目	共通語	分類	出現数
ノ	が	格助詞	1
合計			1

2. 6. 6 話者 MBT の談話音声

話者 MBT の談話音声に現れた方言的要素は 32 例であった。もっとも出現数が多かったのは文末部分に来る「ヤ」である。この「ヤ」という形式は話者 MTS (DB)、話者 FMK の談話音声にも現れている。しかし使用例を見ると、これら 2 名の場合は終助詞 (疑問) であり、話者 MBT の「ヤ」は共通語の「だ」に相当する助動詞とするのが適当である。話者 MBT の「ヤ」は以下のような文で現れている。

- ・放火未遂ヤね。(放火未遂だね)
- ・あれヤねー。(あれだねー)
- ・極悪非道なやつヤね。(極悪非道なやつだね)
- ・気が狂ったわけヤないよね。(気が狂ったわけじゃないよね)
- ・騒音公害ヤねー。(騒音公害だねー)
- ・なんか そんな感じヤったかなー。(なんか そんな感じだったかなー)

陣内 (1996) によれば、熊本市とその周辺部では断定の助動詞「ダ」が優勢であったが、近年になり「ヤ」の浸透が見られるとしている。話者 MBT の談話音声からも同様の傾向が窺える。

その他、他の話者の音声に現れていないものとして、「マゴ」が挙げられる。「とても」の意味で用いられる。「マゴきつい (とてもきつい)」、「マゴ痛い (とても痛い)」のように用いられる。

表 9 話者 MBT

項目	共通語	分類	出現数
ヤ	だ	助動詞	11
テ(引用)	って	助詞	4
ナンサマ	とにかく	副詞	3
ン	ない	否定辞	3
ソン	その	音便	1
タイ	だよ	終助詞	1
ツ	の	終助詞	2
タイ	だよ	終助詞	2
トル	ている	助動詞	1
ナン	何	代名詞	1
マゴ	とても	副詞	1
ヨル	~ている	助動詞	1
ン	の	音便	1
合計			32

2. 7 談話音声の特徴

以上、収録した3談話の方言的特徴について概観した。談話音声全体を見渡してみると、方言形の名詞は自称詞の「ウチ」などを除いてほとんど出現しないという結果になった。また、方言形の形容詞や動詞についてもほとんど出現していない。それに対して、出現した方言要素の大部分を占めているのが、助詞、終助詞、助動詞、否定辞などであった。

馬場(2005)は、熊本市成育の大学生の会話音声进行分析し、その特徴について「この会話では、接続詞、助詞、助動詞など、実質的な意味を持たず、文法機能を担う要素が方言的要素となり、これら方言的要素によって会話、発話の枠組みを形作り、そこに入る実質的な意味を持った語句には方言的要素は選ばれにくいということになる。熊本方言に特徴的な「暑か」「寒か」のように「～か」で言い切られる形容詞もまったく見られない」と述べている。以上のように、方言形の名詞や動詞、形容詞を用いず、助動詞や助詞、終助詞などで方言形を使用するという傾向は、若年層熊本方言話者の特徴でもあると考えられるが、以上の傾向は最近に始まったわけではないようである。秋山・吉岡(1991)においても、若年層の会話において伝統的な熊本方言の語彙は用いられないが、助動詞「タイ」や助詞「ケン」、終助詞「ト」などの使用は優勢であると報告している。本報告での談話音声においても、方言形の名詞や形容詞、動詞の出現数は低く、逆に助詞、助動詞の出現頻度が高いということから、先行研究と同様の傾向が窺える。

第3節 熊本方言の音調

前節において分析の対象とする談話音声の概要について述べた。本節では談話音声をもとに、熊本方言の音調上の特徴について見ていくこととするが、その前提としてこれまでの熊本方言についての先行研究のうち主要なものを取り上げ、概観しておきたい。

3. 1. 平山輝男氏、秋山正次氏による論考

本報告の冒頭でも一部触れたが、これまで熊本方言について言及したものに平山（1937a・b、1940、1951等）、そして秋山（1988）などが見られる。そのうち、平山輝男（1951）で記されている熊本方言の音調についてまとめると、以下のようになる。

一拍名詞に助詞をつけそこで中止するような発話では、「切れ目の音節がやや弱く、同時に微妙に低い」。
二拍名詞では、一語を言い切る時には「カ サ・ハ ナ…」のように、すべて第二拍目がやや弱く時にやや低いのが普通であり、これらに助詞をつけた場合、「カ サ ッ・カ サ モ・カ サ バ…」のように、第二拍がやや高まる。
三拍名詞では「オ下 コ、タバ コ」のように二拍目をやや高め助詞がつくと助詞の直前まで高まる。

以上によれば、一拍名詞に助詞をつけて発話した場合、助詞の部分がやや弱く低くなるという特徴が窺える。これに対し、2拍名詞では単独では語頭が高く、第2拍目がやや弱く、低いのが普通とする。3拍の名詞では、単独では第2拍目がやや高くなるのに対し、助詞が付く場合は、助詞の直前まで高まるとしている。ここで「高まる」とあるが、それは東京方言などにおける上昇と比べると極めて微妙で、「脹らみ」とした方が良いとする。また、自然談話では、一拍名詞の場合「ハノ イタカ（又は、ハノイタ カ）」などのように「助詞のところまで平らかに続くのが普通である」としている。二拍名詞でも同様の特徴を持ち、「カ サ ッ ヤブレタ（又はカ サ ッ ヤブレ タ）」のように助詞まで平らかに続くとしている。

また、秋山（1988）では熊本方言の音調について以下のようにまとめている。（黒色は高、白色は低）。

- 一拍語 ○▼
- 二拍語 ●○・○●▼（文中では○●▼）
- 三拍語 ○●○・○●●▼（文中では○●●▼）

以上の記述から、1拍語に助詞が付いた場合は第1拍目が高く、後続の要素が低いこと、また2拍語に助詞が付いた場合は第1拍目もしくは第2拍目のいずれかが高いこと、3拍語では第2拍目か、第2拍目と第3拍目が高くなることが窺える（ただし2拍語、3拍語が文中に現れた場合、助詞まで高くなる）。ただし、ここでも「高い」と言っても、「●も▼もゆるゆると脹らむといった程度で基本としての平板性をそこなうものではない」とある。

以上の指摘は、語、文節レベルである程度固定した音調の存在が窺える点で共通していると考えられる。また、「高くなる」といっても「脹らみ」程度であるとする点にも共通点が見られる。

3. 2. 前川喜久雄氏による論考

以上に挙げた、平山、秋山両氏の研究は、単語の読み上げを中心としたものであったが、熊本方言のイントネーションについて実験的な手法を用いて検討したものに、前川喜久雄氏による研究がある。そのうち前川（1997）では、統語構造とイントネーションとの関係に注目し、熊本方言のイントネーションについて分析を行っている。主な分析対象としているのは、単純疑問文と疑問詞疑問文とのイントネーション形状の相違、および異なる修飾構造を持つ文のイントネーション形状である。その結果、単純疑問文と疑問詞疑問文とは実現されるイントネーションパターンが異なること、また修飾構造の違いによって実現するイントネーションパターンが異なることを明らかにしている。そして熊本方言のイントネーション規則として、「この方言のイントネーション規則が規定しているのはひとつのイントネーション単位にはひとつのピークが存在するというだけであって、ピークの位置には厳密な規定がない」としている。そしてその音形については「イントネーション単位の先頭でひくくはじまり、その後上昇しながら単位末での急激な下降にいたる」、「そのため1イントネーション単位がカバーする範囲がなくなると（中略）長距離にわたるピッチの連続的な上昇が観察される」とする。

また分析の結果を踏まえ、熊本方言の韻律構造について、トーン理論の立場から図3に示すようなモデルを提示している。それによれば熊本方言の韻律は v と α の2つの階層で構成され、上位の階層 v は発話、下位の階層 α はイントネーション単位を表している。図3の中で、Aの発話は「青か屋根ん家ん見ゆっけん（青い屋根の家が見える）」という文であり、Bは「青か太か家ん見ゆっけん（青い大きな家が見える）」である。Aの「青か屋根」は共通語で「青い屋根」であり、左枝別れの修飾構造となっている。これに対し、Bでは共通語で「青い大きな家」というように、「青い」と「家」は不連続な修飾構造となっている。以上の統語構造の違いは韻律構造にも影響を与え、前者は全体が1つのイントネーション句を形成するが、後者は「青か」と「太か家ん見ゆっけん」がそれぞれイントネーション句を形成する。前川氏のモデルでは、語ごとにピッチ・パタンの指定がなく、統語構造やフォーカスなどの諸要因が発話のイントネーションの形状に影響を与えるとしている。

前川氏による一連の研究は、トーン配列による音調記述の手法を熊本方言に適用し、体系的な分析を試みた点で先駆的な研究であると言える。しかしながら、その論の根本的な前提となっている、語レベルのピッチ・パターンを認めないという点については、以下に挙げる郡（2006）で異なる主張が見られる。

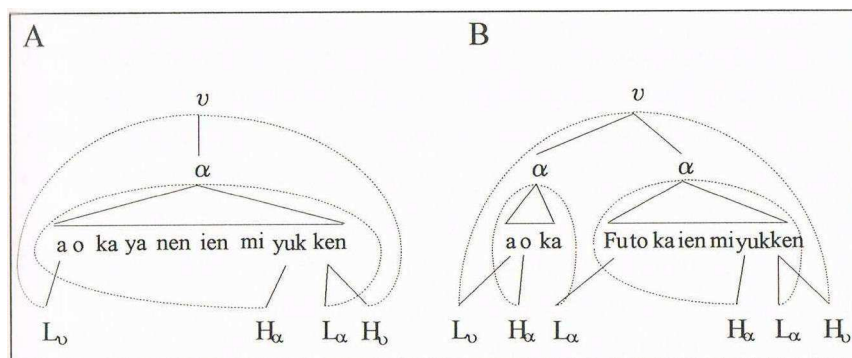


図3 熊本方言の韻律構造（前川1997より抜粋）

3. 3. 郡史郎氏による論考

以上に挙げた前川氏の論考に対し、郡（2006）では前川氏と同様の手法⁶を用い、熊本方言の音調について検討している。具体的には、「鹿児島でラーメンをたくさん食べた」「鹿児島のラーメンをたくさん食べた」「青森でおみやげをたくさんもらった」「青森のおみやげをたくさんもらった」などの意味的限定関係の異なる文について分析を行い、それぞれの特徴を明らかにしている。ここで統語構造ではなく意味的限定関係とするのは、例えば意味的限定関係にある「奈良のもみじを」ではそれぞれの文節が音調的に一体化するが、修飾構造関係にありながらも意味的限定関係にない「奈良の法隆寺」では原則としてそれぞれの文節が音調的に独立する為であるとする。

前川氏同様、共通語のテスト文を熊本方言の文に直して発話した音声に対し分析を行った結果、「直前の文節から意味的な限定を受けない文節は音調的な独自性を明瞭な形で保ち、1文節が1音調句を作る」こと、一方「意味的な限定関係にある隣接2文節は、合体して1音調句を形成する」ことを明らかにしている。ただし、意味的な限定関係あっても文節ごとに音調的主体性が残っていることが多いとし、このような特徴をもとに「この方言では文節のように単位ごとに音調的主体性がある、それが隣接文節と意味的な限定関係にある場合は弱まったり消失したりすると考えるのが適当かと思われる」と述べている。また、文節だけではなく文末助詞の「ネ」や否定文末などが独立した音調句を形成することを踏まえ、語以下のレベルの単位でも音調単位になることを報告している。その結果、「この方言では基本的に語レベルの単位ごとに音調的な独立性があること、そしてそうした音調単位にはかなりの程度固定的な音調の特徴があるという見方」が出来るとしている。また、その「固定的な音調」とは「冒頭から上昇し、内部のどこか（主に次末音節の末尾か内部）で下降する」音調であり、また「語レベルの単位」で音調上の独立性があることを踏まえ、「この方言は「無アクセント」ではなく（高さの）アクセントがあると言うべきであろう」と述べている。ただし、それらの音調のパターンは厳密には定まっておらず、その為「非定型アクセント」を持つとしている。

熊本方言において、語あるいは語レベルの単位が音調的独立性を持つこと（すなわちそれらが音調単位となること）は、先に挙げた平山氏や秋山氏も一部示唆しており、また前川氏による論考（前川1997）においても、熊本方言におけるダウンステップの現象に触れた際、イントネーション句が1つの語に対応する例を示している。

郡氏の研究は熊本方言の音声において、語レベルの単位が音調的な独立性を持つことを実証的に示した点で注目される。しかしながら、実験環境下の音声に分析に基づいているため、実際の会話の音声にも反映されるかという点で検証の余地が残されている。

本報告では、以上に見たような熊本方言の特徴が談話音声においても見られるのかについて、談話音声をもとに予備的な分析を行った。本報告での検証は断片的で限られた範囲の現象しか取り扱っていないが、談話音声を使用して研究を行う際のひとつの実践例として位置づけられるであろう。

以下の節では、最初に語レベルの音調の独立性について検証を試み、形容詞・形容動詞が名詞を修飾している文を例に挙げて考察する。その結果を踏まえ、語レベルの音調的独立性を希薄にする要因として、複数の文節を単位としたイントネーションについて述べる。そして最後に、談話の概要で見た方言的要素の音調について検討する。

⁶ 共通語の文を発話者に提示し、発話者はそれを自分の方言に翻訳してから発話する手法で、郡氏はこのような方法を「シミュレーション法」と読んでいる。

3. 4. 語レベルの音調の独立性

前節で述べたように、先行研究により熊本方言において語および語レベルの単位で、音調的独立性を持つことが報告されている。しかし、それらは限定された対象文の発話音声から導かれた結果であり、果たして談話音声においても同様の傾向が見られるのかについては改めて検証する必要がある。

共通語において隣接する2文節が、修飾関係、もしくは意味的な限定関係にある場合、音調的にひとつのまとまりをなすことが知られている（前川喜久雄 1998、郡 1997、窪菌晴夫 1997 等）。以上に注目し、熊本方言の談話音声では修飾・被修飾関係にある2文節がどのような音調を見せるのかについて検討した⁷。

3. 4. 1. 修飾・被修飾関係にある語の音調

我々の調査では談話音声の収集に当たり、いくつかの昔話のタイトルを談話参加者に提示し、その昔話の内容を談話参加者が協力して再生していく、とうタスクを課した。そのため、話者間で出現する語に共通性が見られた。名詞について見れば、ほとんどの話者で「爺さん」「爺ちゃん」「お爺さん」「お爺ちゃん」などの名詞の出現頻度が高く、その他、「犬」、「殿様」、「話」などの語も共通して出現頻度が高かった。その理由としては、提示した昔話のタイトルに『花さか爺さん』や『かちかち山』、『こぶ取り爺さん』などが含まれており、それらの昔話には「爺さん」「お爺さん」などの語が共通して現れることが挙げられる。そしてそれら「お爺ちゃん」「お爺さん」などの語が用いられる場合、形容詞および形容動詞の「いい」「悪い」「意地悪な」などが先行し、後続語を修飾している例が少なからず観察された。以上に注目し、これらの形容詞・形容動詞が名詞を修飾している例について検討を加えた。

3. 4. 1. 1. 形容詞動詞＋名詞

図4は話者FOMによる「意地悪な爺さんが」という発話のF0曲線とスペクトログラムである。図の縦軸は、物理的なHz値を人間の知覚に近いとされる対数で表現したものであり、横軸は時間長である。図の上には目安としてスペクトログラムに対応する分節音をひらがなで表記し、スペクトログラムの視察によって推定される語の切れ目を点線で示した。当該の発話の前後は、「それを聞きつけた、隣の、**意地悪な爺さんが**… えー 自分も、宝欲しさに、嫌がるコロを無理やり山へ引っ張って行きました」のようになっており、『花さか爺さん』の昔話について内容を再生している場面で行われている。ここでは「意地悪な爺さん」の後に助詞「が」が接続しそこで中止しており、「意地悪な」の前に1秒程度、「爺さんが」の後に3秒程度のポーズが見られる。文法的な文としては完結していないが、独立した句を形成していることが窺える。

図を見ると、形容動詞「意地悪」の冒頭は低く始まり、その後第4拍目にかけて上昇が見られる。「る」でピークが見られ、続く「な」の内部で下降している。後続の「爺さん」の冒頭は、先行する「意地悪な」の末尾よりもやや高く始まり、「爺」の内部で上昇してピークを迎えている。その後、徐々に下降しながら助詞「が」まで続き、「が」の内部で急激な下降が見られる。「意地悪な」の冒頭は、176.8Hz、ピークは206.2Hz、末尾は154.1Hzである。一方、「じいさんが」の冒頭は164.2Hz、ピークは192.7Hz、

⁷音調の分析には音声の聴取と併せ、音声のF0曲線（Fundamental Frequency Contour）およびスペクトログラムを参照した。分析には音声分析ソフトウェアPRAAT（<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>）を用いた。

「が」の下降直前は 146.1Hz、「が」末尾は 105.9Hz である。「意地悪な」のピークから末尾までの高さの幅は 52Hz 程度、「爺さんが」内部の冒頭からピークまでの幅は約 30Hz 程度となっている。F0 曲線から及び高さの幅から見ても、修飾関係にある「意地悪な」と「爺さんが」との間に明確な音調上の切れ目が観察され、また聴覚印象からも「意地悪な」と「爺さん」の間に切れ目が感じられる。

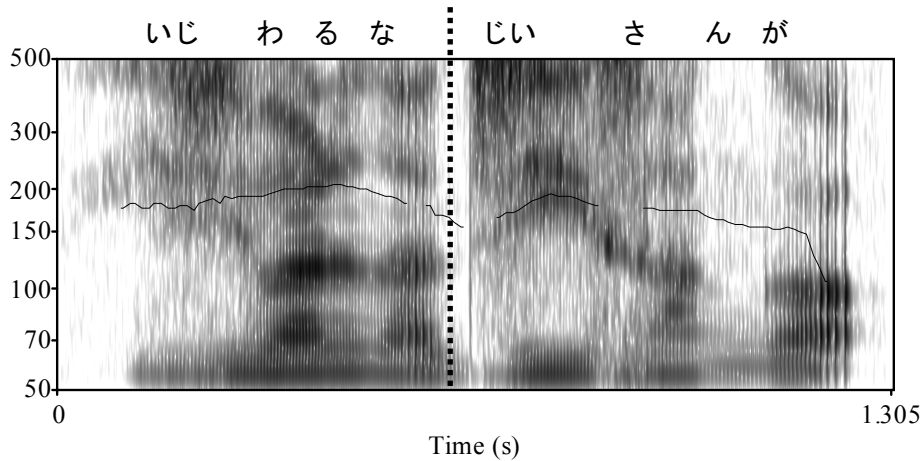


図 4 話者 FOM による音声

続く図 5 も話者 FOM による発話で、「意地悪な爺ちゃんに殺さるっつでしょ？」の F0 曲線とスペクトログラムである。ここでも「花さか爺さん」について話している場面で、発話の前には「だけん灰になるた、灰、になる、前はー、いじわるな爺ちゃんに殺さるっつでしょ？（意地悪な爺ちゃんに殺されるんでしょ？）」となっている。ここでも「意地悪な」の冒頭は低く始まり、その後上昇した後、なだらかな山を描きながら、末尾部分で下降が見られる。「意地悪な」の冒頭の高さは 165.5Hz で、明確なピークは見られないが最高部分の高さは 189.1Hz、末尾部分は 145.5Hz であった。後続の「爺ちゃんに」を見ると、ここでも冒頭は低く始まり、その後上昇した後、ほぼ平坦に続いている。冒頭の高さは 156.0Hz、上昇後の平坦部分の最高値は 170.9Hz で、約 15Hz の差がある。その後、ほとんど平坦な部分が続いた後、助詞「に」の内部で下降が見られる。「に」の下降直前の高さは 167.3Hz、末尾の高さは 140.5Hz で、30Hz 程度の幅が見られた。

以上はいずれも形容動詞「意地悪」が名詞「爺ちゃん／爺さん」を修飾している例であるが、「意地悪な」と「爺ちゃん／爺さん」の間には音調的な切れ目が存在している。またそれぞれの語の音調の概形を見ると、冒頭が低く始まり、その後わずかに上昇した後明確な高さの変化が無く、活用語尾、助詞まで続いている。そして活用語尾、助詞内部で下降するというパターンを取っている。このような音調のパターンは他の形容動詞にも見られたことから、形容動詞と名詞は修飾・被修飾という関係にあっても独立した音調単位を形成することが窺える。

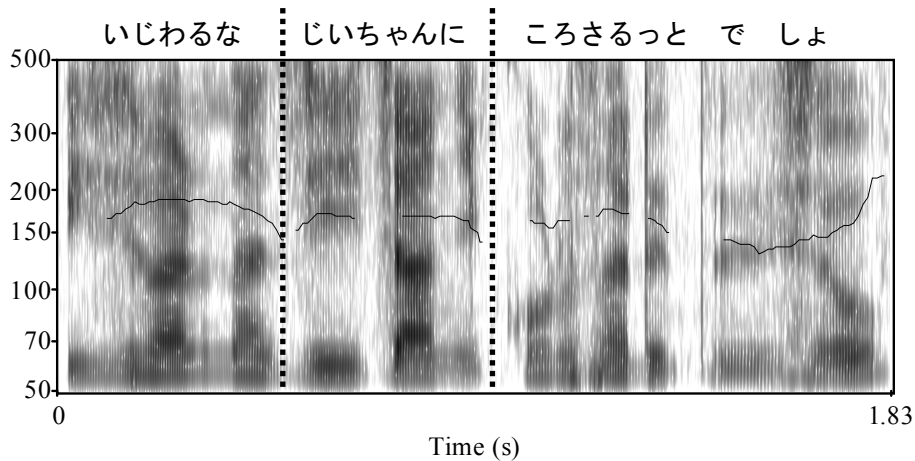


図 5 話者 FOM による音声 (DB)

しかし以下の図 6 に示すように、形容動詞と名詞の音調的独立性が明確に見て取れないようなケースも観察された。図 6 は、話者 MTS による「**陽気なお爺さんからその話を聞いて一**という発話である（「その **陽気なお爺さんからその話を聞いて一**、なんかその人もほっぺたにこぶがあったけん、なんか「じゃあ俺も取ってもらおう」かなんか、なつて一、」）。ここでは形容動詞「陽気な」が後続名詞の「お爺さん」を修飾している例であるが、F0 曲線を見ると「陽気な」と「お爺さん」の間に明確な切れ目は見られない。また聴覚印象でも、「陽気なお爺さんから」までがひと続きに聞こえ、「陽気な」と「お爺さん」との間に音調的な切れ目は感じられなかった。F0 値から見ても、「陽気な」の冒頭は 112.0Hz、最も高い部分で 132.5Hz なのに対し、スペクトログラムで推定できる「お爺さん」の冒頭部分の最も低い部分でも 124.5Hz と、最高値から 8Hz 程度の幅しかない。

「陽気なお爺さん」より後の部分を見ると、「その話を」の部分も平坦に近く、続く「聞いて」の「きい」の部分から発話末に向かって上昇が見られる。その後の「て」は高く付き、母音部分でやや高さが上昇した後、下降に転じ、「昇降調」⁸とでも呼べそうな形状を成している。発話全体を見ると、発話末以前のピッチレンジが全体的に圧縮され、全体的に平坦に近くに見える。

このような発話末の「昇降調」とでも言い表せそうな音調はこの発話だけに限らず、量的な差はあるが他の話者にも見られた。そして興味深いことに、「昇降調」が現れた場合、複数の文節が平坦に近くなる現象が、他の発話（そして他の話者の発話）においても共通して観察された。以上から仮定されるのは、「昇降調」は複数の文節を音調的に一まとまりにし、発話を構成する語や文節の音調的独立性を希薄にするということである。以上の「昇降調」については後でも取り上げるが、図 6 の例で「陽気な」と「お爺さん」の間に音調の切れ目が無いのは、「昇降調」の影響かと考えられる（「昇降調」については以下の節以降で改めて検討する）。

⁸ ここでは、このようなイントネーションパターンを仮に「昇降調」とした。この呼称はあくまでも一時的な呼称であり、先行研究で報告されているような「昇降調」との関連は考慮していない。

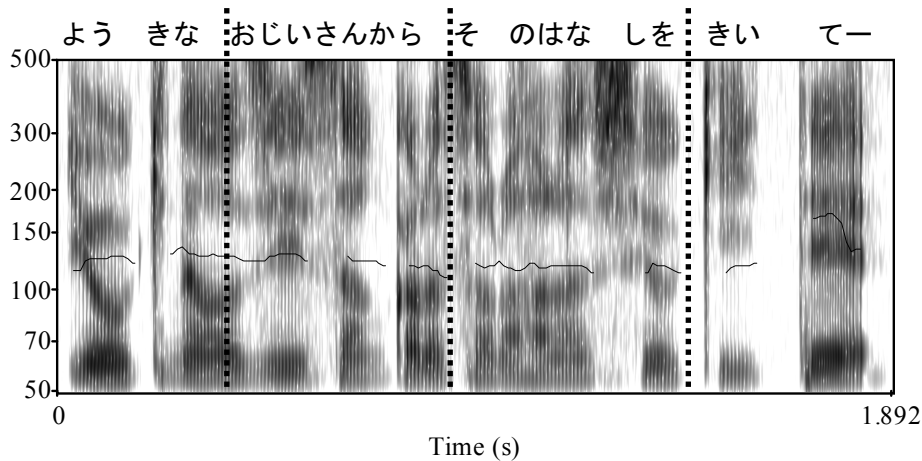


図 6 話者 MTS による音声 (DB)

3. 4. 1. 2. 形容詞＋名詞

以上は形容動詞が名詞を修飾している例であったが、以下は形容詞が名詞を修飾している場合の音調である。図 7 は、話者 FHE による「この良い爺ちゃんが…」の例である。指示詞「この」の後、「いい」の冒頭は高く始まり、続く「爺ちゃん」は下降を辿りながら、助詞「が」が低く付いている。助詞「が」の部分はクリーキーで、F0 曲線に途切れが見られる。先の形容動詞が名詞を修飾している例では、前部要素と後部要素が音調的に独立していたが、図 7 を見ると、修飾語の形容詞の「いい」と後続の被修飾語の「爺ちゃん」とは音調的に一体化していることが分かる。

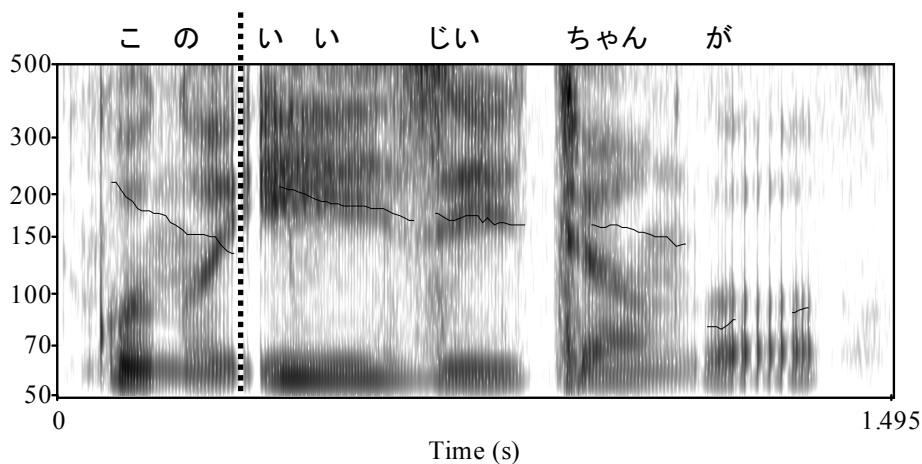


図 7 話者 FHE による発話

続く図 8 は話者 FMK による発話である。前後は「で、なんか、その、なんか琵琶で弾くのを聞きに来て一、で一、**なんか偉い人の所に**、来て一「弾け」みたいな感じで言われて一・・・」である。「なんか」の「か」部分は前部要素に低く付き、母音部分で高さが下降している。その後の形容詞「偉い」部分では、冒頭が低く始まり（冒頭の F0 値：179.2Hz）、2 拍目以降から上昇し、「と」部分で最も高くなり（222.1Hz）、その後助詞の「に」まで概ね平坦に続いている。ここでも形容詞「えらい」と後続の「人」との間にピッチの切れ目は無く、音調的に一体化していることが分かる。

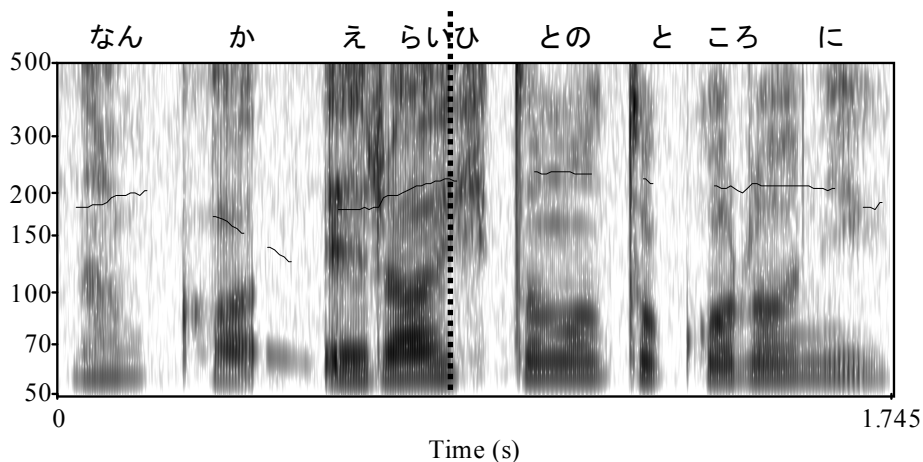


図 8 話者 FMK による発話

続いて図 9 は話者 FMK による発話である。前後は「そうそう。したら悪いおじいさんが一・・・連れて行って・・・、犬を。「掘れ」って言った、んだっけ？」となっている。発話中「したら」に後続する「悪い」部分の冒頭は低く始まり、2 拍目の「る」で上昇し「い」でピークを迎え、その後下降している。後続の「お爺さんが」の冒頭は前部の形容詞末尾の「い」に続いて低くなっている。「じ」の母音部分から上昇し、「さ」の母音部分でピークを迎えている。その後下降に転じ、鼻音部分が低くつき、助詞「が」の内部で上昇・下降が見られる。形容詞「悪い」の冒頭の高さは 177.0Hz、第 2 拍目にあるピークは 245.1Hz であった。後続の「お爺さんが」のピークは「さ」にあり、こちらは 236.0Hz であり、「悪い」のピークと 10Hz 程度の差しか無い。上の例でも、修飾関係にある形容詞と名詞それぞれ独立した音調単位を形成していることが分かる。

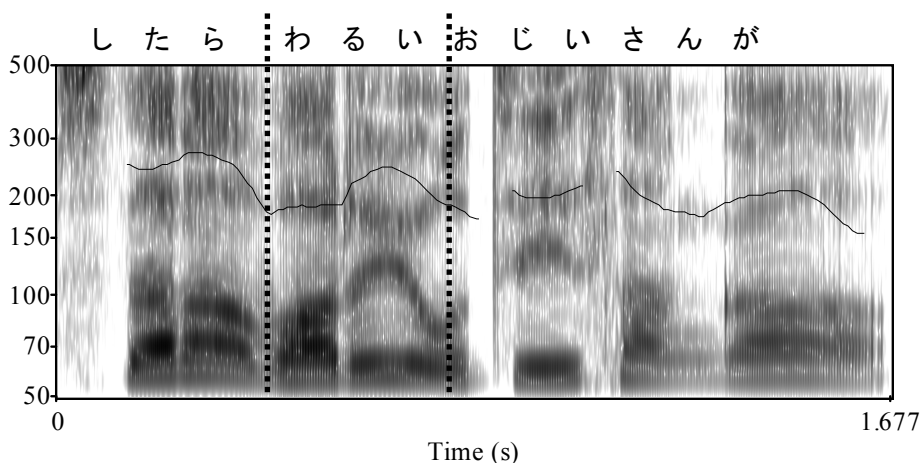


図 9 話者 FMK による音声

以上の例を見ると、形容詞が名詞を修飾する例にあつては、形容詞と名詞が一体となって 1 つのまとまりを成すものと、それぞれが音調的に独立しているものが存在していることが分かる。これに対し、形容動詞においては、特殊な環境（「昇降調」のような複数の文節にまたがる音調など）を除いて、比較的安定しているようである。このような形容動詞と形容詞の性質の違いは、ひとつに語としての自立

性とも関係している可能性がある。

また形容詞において音調的な独立性を持つ例とそうではない例が見られたが、このような違いの背景には様々な要因が考えられる。そのうちのひとつが修飾構造である。

前川（1998）では、東京方言において形容詞が名詞を修飾する場合、それらの語が無核か有核かによって異なる音調が見られるとしている。有核語である「青い」と無核語である「屋根瓦」からなる「青い屋根瓦の家が見える」という文と、無核語の「赤い」と同じく無核語である「屋根瓦」からなる「赤い屋根瓦の家が見える」という文のピッチパターンを比較したところ、前者では、「アオイ」と「ヤネ」の境界にアクセント句境界の存在が認められるのに対し、無核語と有核語の連鎖であるアカイヤネガワラノでは、全体がひとつのアクセント句を形成することを報告している。これに対し、前川（1997）では熊本方言による「青い屋根の家が見える（アオカヤネンイエンミュッケン）」と「青い大きな家が見える（アオカフトカイエンミュッケン）」という発話を分析した結果、連続した修飾構造を持つ「青い屋根の家」の内部にはイントネーションの境界が存在しないが、不連続な修飾構造を持つ「青い大きな家」の方では「青い」の直後に境界が導入されるとしている。

本報告で挙げた例は、いずれも左枝分かれの修飾構造であるため、音調の切れ目は顕在化しないと予測されるが、図8の例を見ると形容詞と名詞の間に明確な音調の切れ目が見て取れる。これにより音調の独立性には修飾構造以外の要因も影響すると推測される。

3. 4. 1. 3. 「爺」類の名詞の音調

談話音声に現れた名詞のうち、話者間でもっとも出現頻度の高かった「爺さん」「爺ちゃん」、あるいは「お爺さん」「お爺ちゃん」などの音調であるが、共通語では「爺さん」「爺ちゃん」は第1拍目にアクセント核を持ち、「お爺さん」「お爺ちゃん」は第2拍目にアクセント核を持つ。これに対し、先に挙げた熊本方言の例では「爺ちゃん」「爺さん」の音声で語内部に下降が無く、後続の助詞内部で下降が見られた。このような音調は「殿様」のように、共通語で非尾高型のアクセントを持つ名詞にも観察された。また、形容詞の「いい」においても共通語では頭高型のアクセントを持つが、熊本方言においては、語内部に下降は無く、語頭と語末でややF0が低いという音調が見られた。同様の傾向は他の形容詞、例えば共通語では第3拍目にアクセント核のある「意地悪」などにおいても観察された。以上は語レベルで音調の独立性を持つという先行研究の結果と共通しており、これらの特徴が熊本方言を特徴付けるものであると言える。

しかしながら、全ての談話音声におけるこれらの語が同様の音調を示したわけではなく、話者ごとに傾向の違いが見られた。例として、話者ごとに見た「爺さん」「爺さん」、「お爺さん」「お爺ちゃん」の音調の出現傾向を表10に示す。表中の「出現数」とは、談話音声中出现した「爺ちゃん」「爺さん」「お爺さん」「お爺ちゃん」の数である。また「助詞前下降」とは後続する助詞の前あるいは助詞の内部で声の高さの下降が見られるもので、「無下降」とは語の内部で声の下降が見られず、また助詞内部でも下降が見られないものである。これらに対し、「語中で下降」とは助詞の前もしくは助詞内部で声の下降が見られるものである。この「語中で下降」の音声は、「爺ちゃん」「爺さん」の場合は語の第1拍目直後に下がり目が来ることが多く、「お爺さん」「お爺ちゃん」では第2拍目の直後に下がり目がくる事が多く、共通語での音調と一致することが多い。表10を見ると、話者ごとに「爺ちゃん」「爺さん」「お爺さん」「お爺ちゃん」において出現する音調の違いがあることが窺える。これらの語で助詞前の下降が最も多いのは話者FOMで、12例中7例で半数以上を占めている。これに対し、話者MTSなどにお

いては助詞の前で下降している例も見られるが、下降しない例の方が大部分である。同様の傾向は話者 MBT にも見られ、大半が無下降の音調であった。また、話者 MTS や MBT では、助詞前で下降する音調よりも、共通語と同じ音調の方が多く出現している。共通語と同様の音調の出現には、いわゆる共通語化の現象が考えられる。また、話者 MBT と MTS による DC の談話は初対面同士で年齢差があることから他の談話よりも親密度が低い。談話の中では丁寧体が使われることが多く、そのようなスタイルが音調の出現に影響を与えている可能性も考えられる。

表 10 名詞「爺」類の音調

談話	話者	出現数	助詞前下降	無下降	話中で下降
DA	FHE	3	0	1	2
	FOM	12	7	3	2
DB	MTS	23	1	16	6
	FMK	1	0	0	1
DC	MBT	25	3	15	7
	MTS	13	1	10	2

3. 5. 「昇降調」

以上「爺」類を例に名詞の音調について検討したが、その内の無下降の音調が見られるその他の要因として、複数の文節を単位としたイントネーションの影響が考えられる。図 6 の発話でも述べたが、収集した談話音声において複数の文節を単位とする特徴的な音調が見られた。図 10 は話者 MBT による「となりの爺さん家に」という発話である。図 10 を見ると、句末の「に」の部分で一旦 F0 が上昇し、その後下降している。また「に」の部分で母音の伸長が見られる。ここでも図 6 で見たような、区末の「昇降調」とでも呼べるようなパターンが観察される。

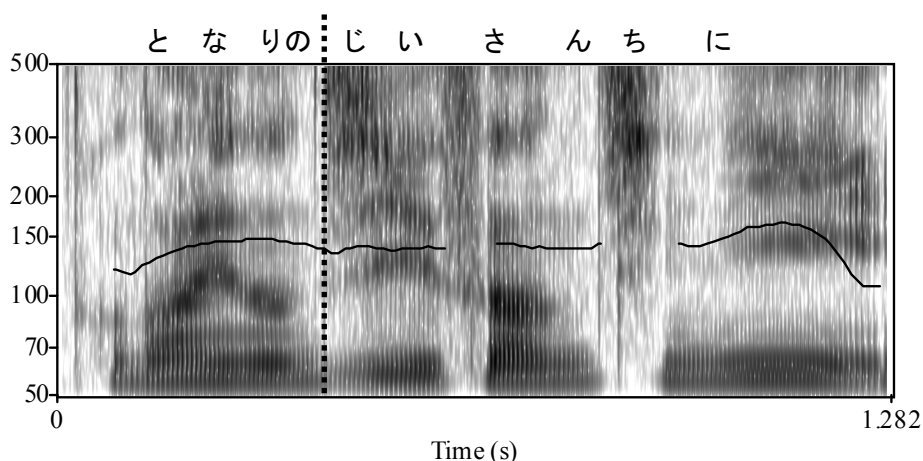


図 10 昇降調の例（「隣の爺さん家に」話者 MBT）

このような発話単位末の分析の対象とした 6 名の話者全てに観察された。各話者における昇降調の出

現数は表 11 に示すとおりである。なお参考までに書き起こし字数も併せて示す。表 11 から全ての話者において句末の昇降調は見られるが、出現数においては話者ごとに差が見られる。句末の昇降調がもっとも多く観察されたのが DB の談話における話者 MTS の音声であった。ただし、同じく話者 MTS の DC の談話では、出現数は 30 と大幅に少なくなっている。書き起こし文字数を発話量の目安と考えると、DB の談話における話者 MTS は相手の 2 倍程度の発話量であるが、DC では反対に相手の半分以下の発話量である。DB は友人同士の談話であったのに対し、DC での相手は話者 MTS から見て目上の人物で、しかも面識の無い相手であった。DB では談話の主導権を MTS が握っているのに対し、DC では話者 MBT が談話の主導権を持っていると考えられる。以上から、発話末の昇降調の出現頻度は個人ごとの特徴というよりも、談話でどちらが主導権を握っているか、ということも影響を与えられられる。

表 11 話者ごとに見た昇降調の出現数

談話	話者	出現数	書き起こし字数
DA	FHE	8	1535
	FOM	49	3486
DB	MTS	144	4126
	FMK	55	1939
DC	MBT	53	5058
	MTS	30	2185

そして、その昇降調の出現環境であるが、それは次のような場面で見られた。太字で示したのが、昇降調が見られた部分である。

でー **それを 爺さんが 桜の 前に 撒いたらー**、 **花が 咲いた。** で **それを 殿様が 見ててー**、**ご褒美を もらったんだよね。** (話者 MBT)

以上の発話は、タスクシートにある『花さか爺さん』の内容について談話の相手と確認しあっている状況で行われたものである。ここでの例のように、句末の昇降調は昔話の内容を確認していくような場合に出現することが多かった。

以上のような句末の昇降調の存在や機能は、東京方言については井上史雄（1994）などで指摘され、「尻上がりイントネーション」などと称されてきた。また金田純平（2007）では関西地方在住の日本語母語話者の談話音声をもとに調査した結果、同様の音調が出現することが報告されている。それによれば「句末の昇降調」とは「話し手が言いたい事をできるだけ正確にエンコードしたいという意図に基づいた発話モニタリングが行われている場合に現れる韻律的特徴である」とされる。また、「モニタリングに伴う発話計画によって発話がまとまったメッセージとしての文ではなく、その断片としての句（文節）として発せられることから、句末昇降調は、その末尾に①モニタリングによる発話内容の吟味が済んでいる、②句として閉じた発話であるという「区切り」の標識である、という二つの状態を表す標識として位置づけられる」としている。本報告の談話音声においても、話し手は昔話の内容についての記憶を辿りながら、出来るだけ正確に昔話を再生しようとしているような場面で昇降調が現れることが多く、金田（2007）の指摘と合致すると言える。

また、本調査での昇降調の韻律上の特徴としてそれが現れた場合、発話を構成する語あるいは文節の音調が平坦に近くなる例が見られた。図 6、10 の例と併せ話者 MBT の例（図 11）を挙げる。無声子音に伴って微細な曲線の揺れが見られるものの、発話末の「昇降調」の部分を除き全体的に平坦な音調であり、聴覚印象からも句末まで平坦に続いているように感じられる。このように、発話全体を単位としたイントネーションによって、語レベルの音調の独立性が目立たなくなる例が少なくなく、このことも語を単位としてみた場合、無下降の音調が生じる要因となっていると考えられる。

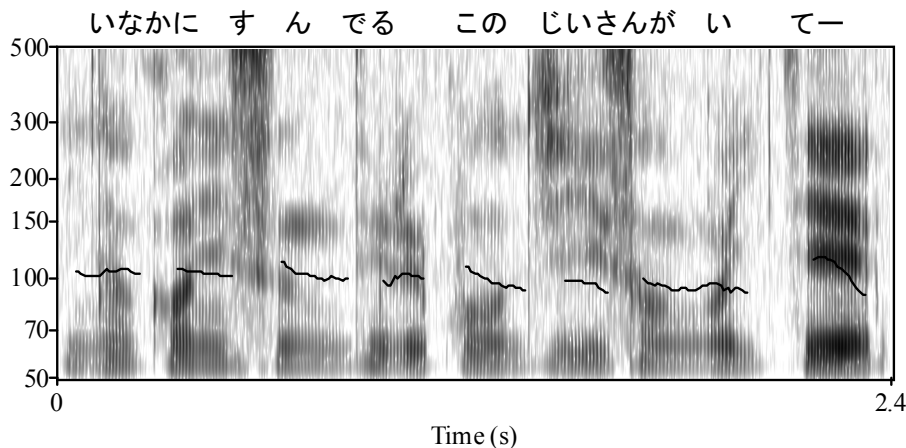


図 11 話者 MBT による昇降調の例

3. 6. ここまでの考察

ここまで総合すると、熊本方言においては基本的に共通語と同様、語レベルの単位で音調上の独立性を持つが、昇降調のような特定の音調に含まれると、語が持つ音調の独立性が希薄になるという仮説を考えることができる。

郡（2006）では、熊本方言について「青森のおみやげをたくさんもらった」という文の第 1 文節と第 2 文節のように、意味的な限定関係にある隣接 2 文節は合体して 1 音調句を形成することを報告している。この指摘は統語構造によって語や文節の音調的主体性が保たれる場合とそうではない場合があることを示しているが、統語構造以外の他に発話全体を単位としたイントネーションも、音調的主体性を希薄にすることが、本報告の結果から窺える。

また、3. 2. 1 節で前川（1997）による熊本方言の音声の分析結果について触れた。それによると、連続した修飾構造を持つ「青い屋根の家」の内部にはイントネーションの境界が存在しないが、不連続な修飾構造を持つ「青い大きな家が」の方では「青い」の直後に境界が導入されるということであった。これに対し、本報告では「いい爺さん」または「悪い爺さん」のような修飾関係にある語の連鎖において、前部要素と後部要素の間に音調上の切れ目がある例が確認された。以上は、一見すると前川（1997）と相反する結果であるように見える。

しかしながら、本報告における昇降調のような、語や文節よりもさらに大きなまとまりを単位とする音調の存在を想定するならば、本報告での結果と前川（1997）の知見との矛盾が解消されるのではないかと思われる。前川（1997）では、熊本方言のイントネーション規則について、「イントネーション単位の先頭でひくくはじまり、その後上昇しながら単位末での急激な下降にいたる」としている。ここでの「イントネーション単位」は複数の語や文節が集まって構成されることがあり、そのため「1 イントネーション単位がカバーする範囲がながくなると（中略）長距離にわたるピッチの連続的な上昇が観察される」とし、このような連続的上昇を「長距離上昇」と名付けている。そして、その例として「青い

屋根の家」の例を提示しているが、これは見方を変えれば「長距離上昇」というイントネーションが発話全体に生じたため、個々の語の独立性が希薄になったからとも考えられるのではないか。前川（1997）では、なぜそのような「長距離上昇」が出現するのか、またその「意味」は何なのかということについては検討されていない。しかしながら、「長距離上昇」が本報告での昇降調のように、何らかの意味や機能を持つ固定したイントネーションパターンであるとするならば、それらは内部に含まれる語レベルの音調的独立性を希薄にするという特徴を持つという点で、共通していると考えられる。

3. 7. 方言的要素の音調

ここまで名詞および形容詞の音調について分析を行い、それぞれの語あるいは文節が音調上の独立性を持つことを確認した。また複数の文節を単位とする昇降調に触れ、その昇降調が現れた場合、それを構成する語あるいは文節が持つ音調的な独立性が希薄になることについて述べた。

以下では、談話音声に現れた方言的要素のうち、出現頻度の高かったものの音調上の特徴について検討を行う。

3. 7. 1. 引用の「て」の音調

馬場良二氏は熊本方言話者による談話音声进行分析し、熊本方言の「引用のテ節」の音調について検討している（馬場 2005）。それによれば、テ節の基本的な音調は「て」にむかってゆるやかに上昇し、「て」の直前で急に下降する」とされ、この「音調の下降が発話の中でテ節の切れ目を示す」と述べている。また、(テ節が)「より大きなイントネーション単位に組み込まれた場合、「て」の直前の下降はなくなり、テ節の音調はより大きなイントネーション単位の一部となる」としている。以上を踏まえ、本報告でも同様の傾向が見られるかについて検討を行った。談話音声の中で、引用の「て」が見られたのは、話者 FHE で 1 例、話者 FOM で 3 例、話者 MTS (DB) で 9 例、話者 FMK で 4 例、話者 MBT で同じく 4 例であった。DC の話者 MTS の談話音声を除いて全ての話者の談話音声に見られることから、熊本方言でも使用頻度の高い方言要素であると考えられる。

図 12 は「あ、や、**小泉八雲**て書いてある」の一部である。図から「こいずみやくも」の部分はほとんど平坦に続いており、続く引用の助詞「て」の内部で下降が見られる。後続要素の「かいてある」は冒頭の「か」から「る」まで下降傾向が見られ、文末の「る」の母音部分で高さの下降が見られる。

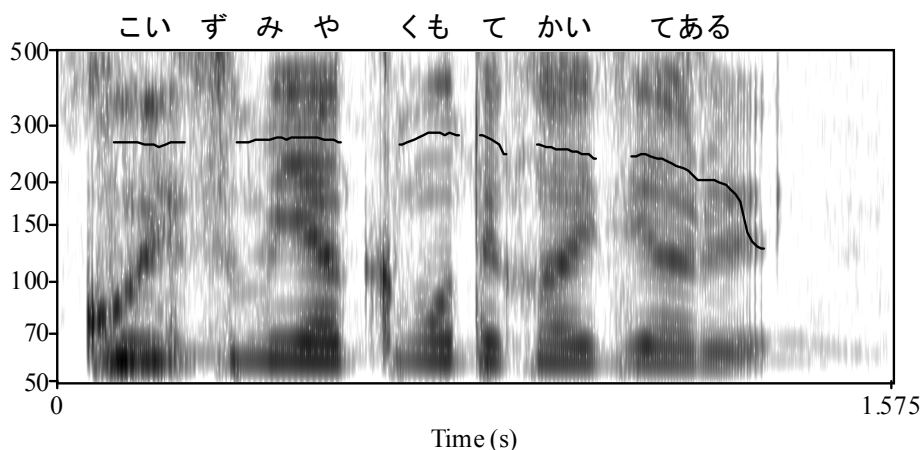


図 12 話者 FOM による「て」の音調

続いて、図 13 に示すのは、話者 FMK の談話音声に現れた「え 耳なし芳一てあれよね？楽器 弾きよってー、」の一部である。「みみなしほういち」の「みみ」部分は低く、3 拍目の「な」にかけて上昇、「しほういち」の「ち」は無声化しているが、平坦に続いている。「みみなしほういち」には下降がなく、「テ」が低く付いている。

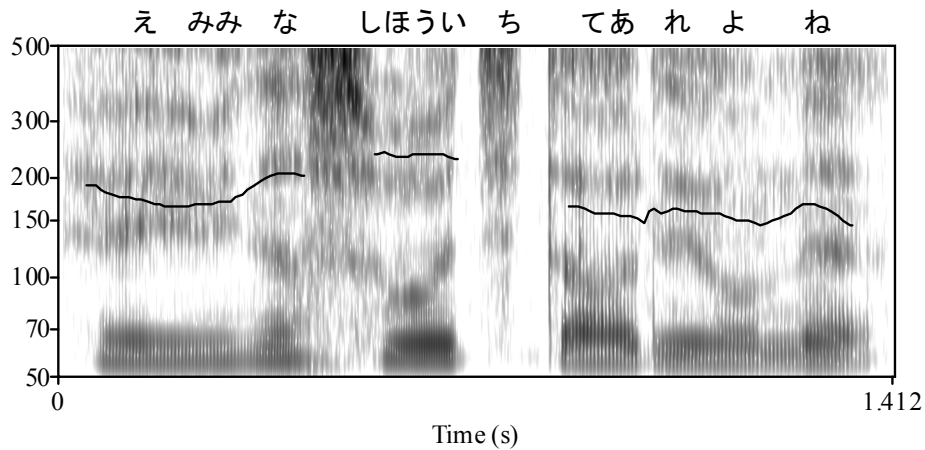


図 13 話者 FHE による「テ」の音調

以上は名詞に引用の「テ」が続いた例であったが、図 14 に示すのは終助詞に続いた例で、話者 FHE による発話「して、そのお札にねたのんでね、**「まだだよ」**て返事をしてくれってゆって、そこにこう止めとくつたいね。」の一部である。冒頭の「ま」の内部で上昇した後、終助詞「よ」までほとんど平坦に続いている。そして助詞「テ」が低く付き、母音の内部で下降が見られる。

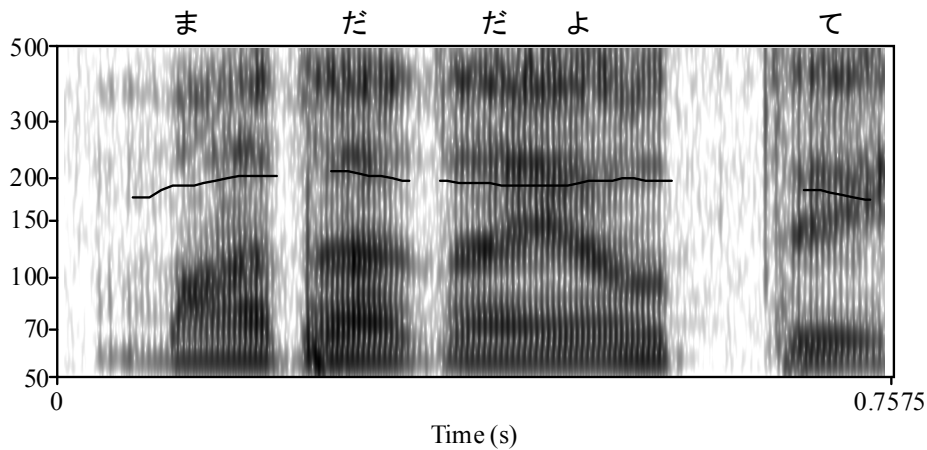


図 14 話者 FOM による「テ」の音調

また、図 15 は話者 MTS による音声で、「でも別 陰気て悪いことじゃないたい。」の一部である。ここでは、引用の「テ」は形容動詞の「陰気」に続いている。発話の最初にある「べつ」は、「別に」の「に」が脱落したものと考えられる。ここで話者 MTS は高揚した様子で話しており、発話の F0 曲線もその心的状態を表すように起伏に富んでいる。「べ」が高く始まり、「つ」が低くなっている。その後、「陰気」も低く始まり、「ん」にかけて高さの上昇が見られる。続く「き」は母音の無声化のため F0 が検出されない。その後、「テ」の「ん」と同じ高さで付き、母音の内部で急激な下降が見られる。

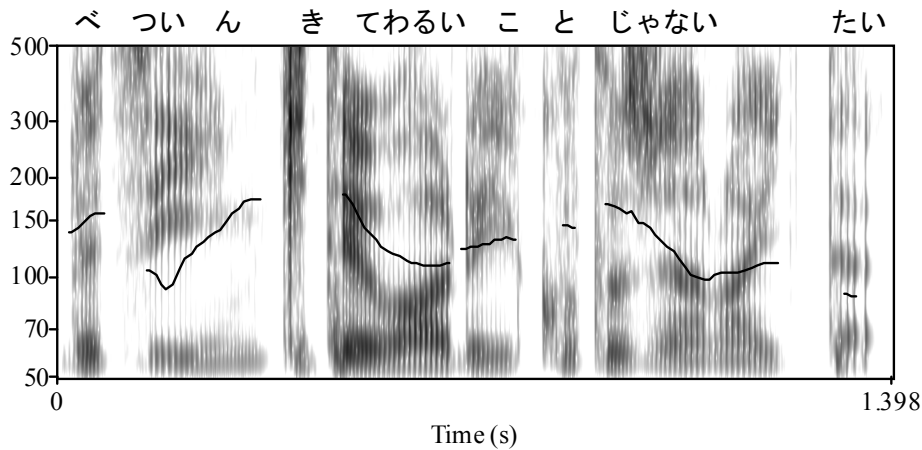


図 15 話者 MTS による「テ」の音調

以上、引用の「テ」の音調を見たが、いずれも例でも「テ」が低く付く、あるいは「テ」内部で下降する例が多く見られた。このことから、「テ節の基本的な音調は「て」にむかってゆるやかに上昇し、「て」の直前で急に下降する」という馬場（2005）の知見と一致する結果が得られたと考えられる。

3. 7. 2. 「ケン」の音調

以上、熊本方言で比較的使用頻度の高い引用の助詞「テ」について検討した。続いて引用の「テ」と同様に出現頻度の高い助詞「ケン」についてその音調を見てみたい。熊本方言における「ケン」は共通語の「から」に相当し、原因や理由を表す。収集した談話音声のうち、助詞「ケン」が現れたのは話者 FOM が 3 例、MTS (DB) で 3 例、FMK で 3 例であった。

図 16 は話者 MTS による「そのお爺さんはその、瘤が邪魔で、**邪魔だったけん**、「あ 取ってくれて ありがとう」って 感じだった」という発話の一部である。図から、「邪魔だ」まではほとんど平坦で、「た」もほとんど同じ高さで続いている。先行要素に高く付くことが分かる。「ケン」部分の最高部分から下降が始まり、「ン」の終わりに至るまで下降が続いている。

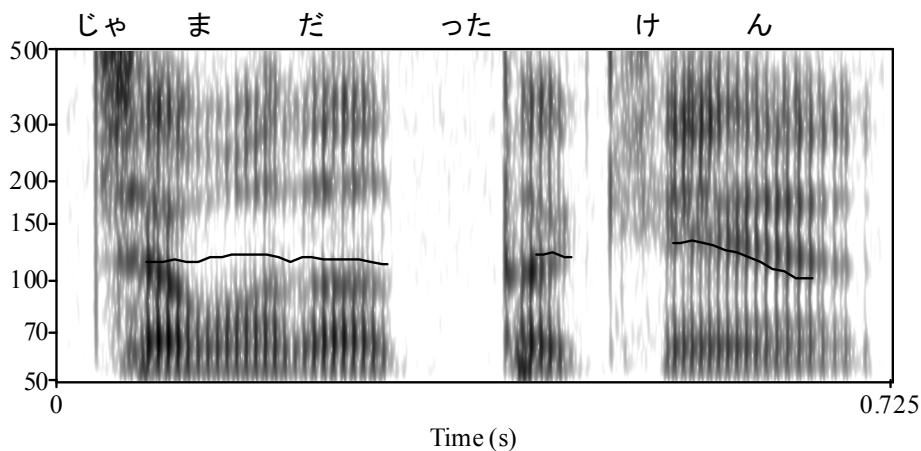


図 16 話者 MTS による「ケン」の音調

また図 17 も話者 MTS による「その人も**ほっぺたにコブがあったけん**、なんか「じゃあ 俺も 取っ
てもらおう」かなんか、なって・・・」という発話の一部である。ここでも前部要素「こぶがあった」
に高く付いている。

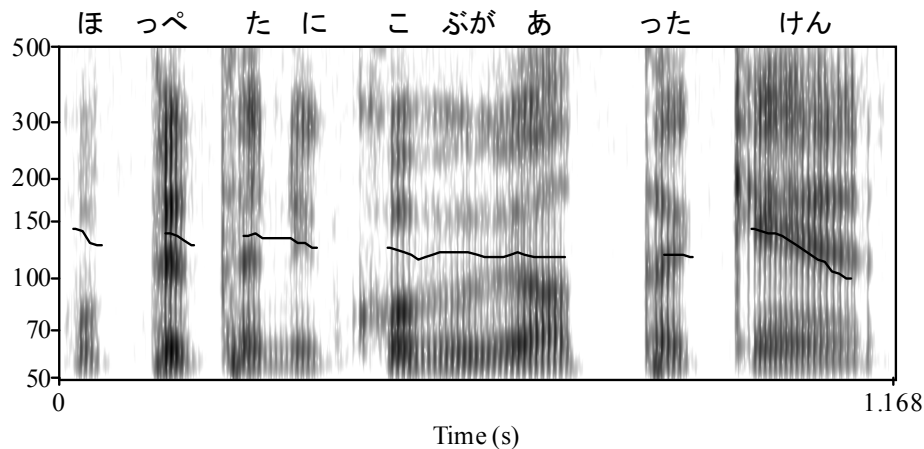


図 17 話者 MTS「ケン」の音調

続いて話者 FOM の「ケン」の音調について見てみる。図 18 は話者 FOM の「こう来て一、踊ったけど
一、でも**下手くそだったけん**、この瘤ばなんかほら、また一、ひっつけて・・・」という発話の一部で
ある。話者 FOH の発話においても先行要素の「下手くそだった」に続き「ケ」が高く付き、「ン」の末
尾にかけて下降が見られる。

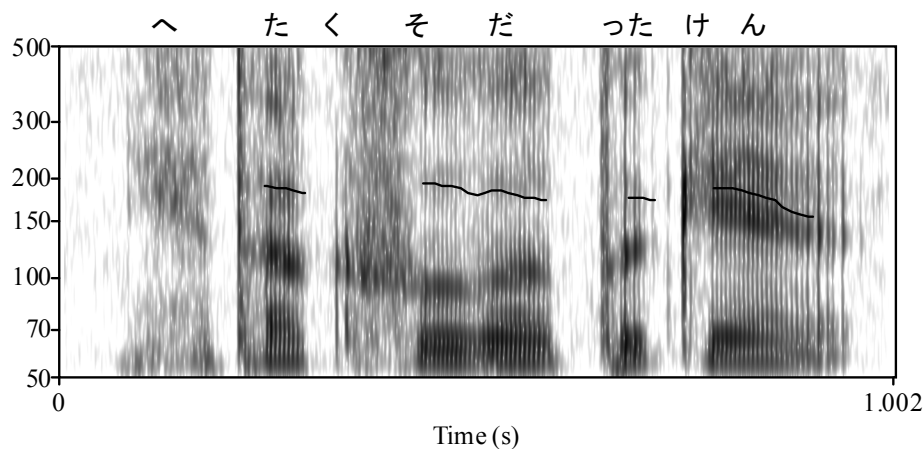


図 18 話者 FOM「ケン」の音調

最後に、話者 FMK の「ケン」の音調の例を示す。図 19 は「まあみんな記憶は一、**曖昧になるけんじ
ゃ?**」という発話の一部である。先行要素の「あいまい」の「い」の終わり付近から助詞「に」につ
けて声の下降が見られ、動詞「なる」の部分はほぼ平坦に続いている。その後、「け」は高く付き、「ン」
の末尾にかけて下降が見られる。その後、文末の「じゃ (じゃない)」で疑問に伴う F0 の上昇が観察さ
れる。

以上の例を見ると、助詞「ケン」は前部要素より高く付く事が多く、「ケ」の拍内で下降を開始し、
「ン」にかけて声の下降があることが分かる。

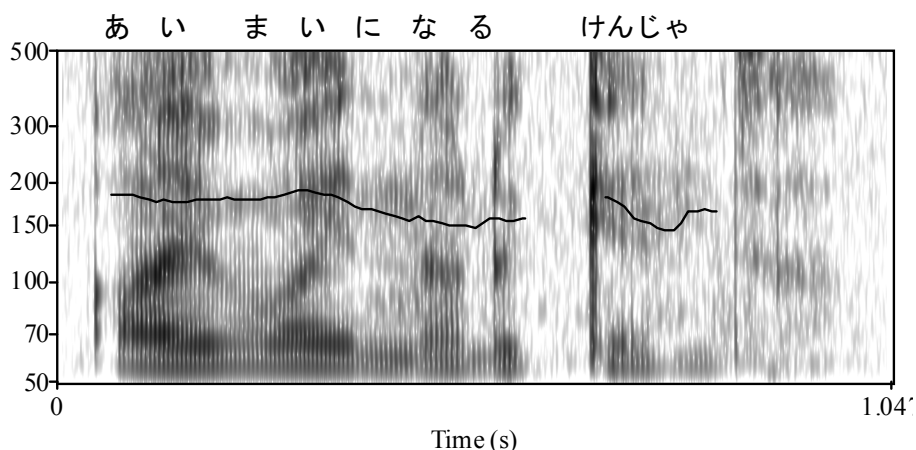


図 19 話者 FMK「ケン」の音調

3. 7. 3. 「ネ」の音調

郡 (2006) では、熊本方言における疑問文の音調について検討する過程で、「青森のおみやげもらった？」や「鹿児島ラーメン食べた？」のような一般疑問文の場合は、「文末文節がひとつの音調句を形成する発音になる」とし、その具体例として、文末文節の始まりは低く末尾に向かって上昇するピッチパターンを例示している。ただし、疑問文では必ず文末が上昇するかというとはなく、文末に来る助詞によって異なった音調を見せるとしている。その例として、「青森のみやげばもらったネ」を挙げ、文末に「ネ」が来る場合、「ネ」の内部で必ず下降するとしている。以上から、熊本方言における「ネ」は「直前より低い音で言うという特徴（低接）をなす」と指摘している。本報告で、以上のような疑問文の末尾で「ネ」が出現した例は無く、以上の指摘を検証することはできないが、ここでは疑問以外の「ネ」の音調について見てみたい。

図 20 は話者 FOM による「なんか和尚さんからね、三枚お札をもらうつたい。」の発話の一部である。第 1 拍目の「お」から第 2 拍目にかけて緩やかに F0 が上昇し、「和尚さんから」の「か」まで概ね平坦に続いている。その語「ら」の内部で下降が見られ、「ね」が平坦に続いている。ここでの「ネ」はいわゆる間投助詞の例であるが、図 20 の例では間投助詞の「ネ」は前部要素と同じ高さで付き（つまり順接）、独立した音調単位をなさないことが分かる。

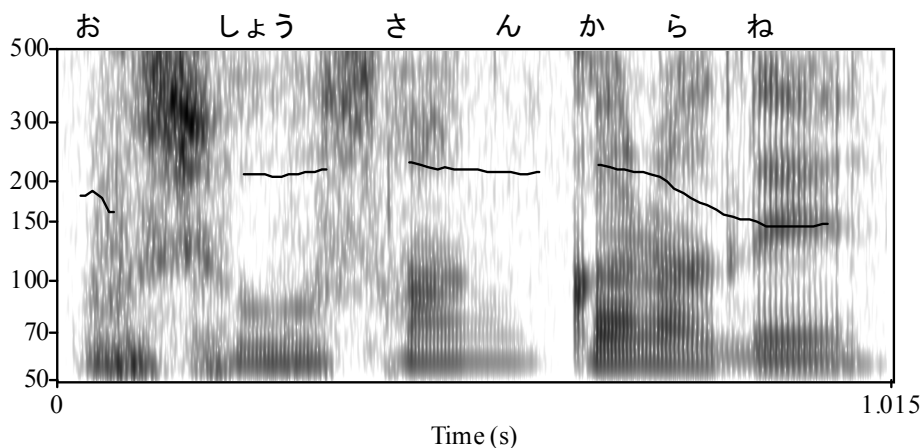


図 20 話者 MTS による「ね」の音調

また図 21 は話者 MTS による「いやなんか、 なんか地方によって、**違うんかね?**」の発話 (DB) の一部である。この発話では第 1 拍目の「ち」の母音が脱落し、「が」部分から F0 が現れている。ともかくも、ピークは「違う」の「う」にピークが見られ、続く「ん」から緩やかに下降が開始しているのが見られる。続く「か」は低く付き、「ね」が概ねそのままの高さで続いている。図 21 の「ネ」は終助詞であり、以上から終助詞の「ネ」も間投助詞の「ネ」と同様、先行部分の高さをそのまま引き継ぎ (すなわち順接)、基本的に音調の独立性を持たないことが窺える。

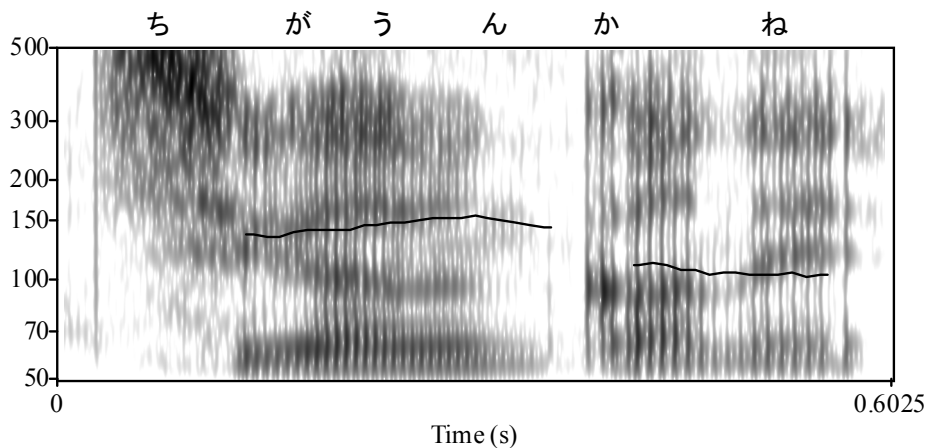


図 21 話者 FOM による「ネ」の音調

以上で見たように、本報告では疑問文末尾に「ネ」が現れず、そのため郡 (2006) の知見を検証することは出来ない。しかし、間投助詞および終助詞の「ネ」の音調について検討したところ、いずれも前部要素の高さを引き継ぐように接続し、独立した音調を持たないことが窺える。

3. 7. 4. 「ト」の音調

本報告で収集した談話音声の中でも特に出現頻度の高い方言的要素は「ト」であった。「ト」は肥筑方言で広く使われる方言要素であり、文末において疑問詞的に用いられる場合がある。「ト」の音調について郡 (2006) は「基本的に音調的主体性はなく、先行形式とともに 1 音調単位を作る」とする。しかし、「トの冒頭からいったん下降させた後で (つまり低接) 上昇する場合もあった」とし、結論としては「トはひとつの音調単位をなしてもなさなくてもよい文末助詞」としている。

図 22 は DB の談話に現れた話者 MTS による「う、うそ うそ **覚えてるんじゃないと?**」の発話である。発話冒頭は低く始まり、その後上昇し「る」の母音部分でピークを迎えている。その後の「ん」から「じゃ」にかけて下降が見られ、「ない」はほとんど平坦に続いている。文末の「と」は「ない」よりも高く付き、内部で上昇が見られる。

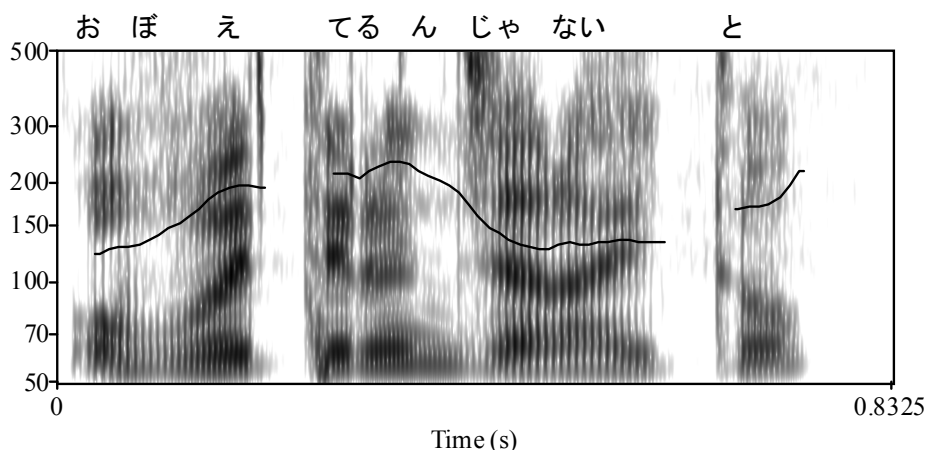


図 22 話者 MTS による「と」の音調

続いて、図 23 は話者 FHE による「でー 二個になったと？ へー」の一部である。冒頭の「でー」の内部で下降が見られる。続く「にこ」の部分は平坦であるが、助詞の「に」から後続の「な」にかけて下降が見られ、「た」に至る。最後の「と」は前部要素と同じ高さに付き、しばらく平坦な部分が続いた後、末尾で上昇している。

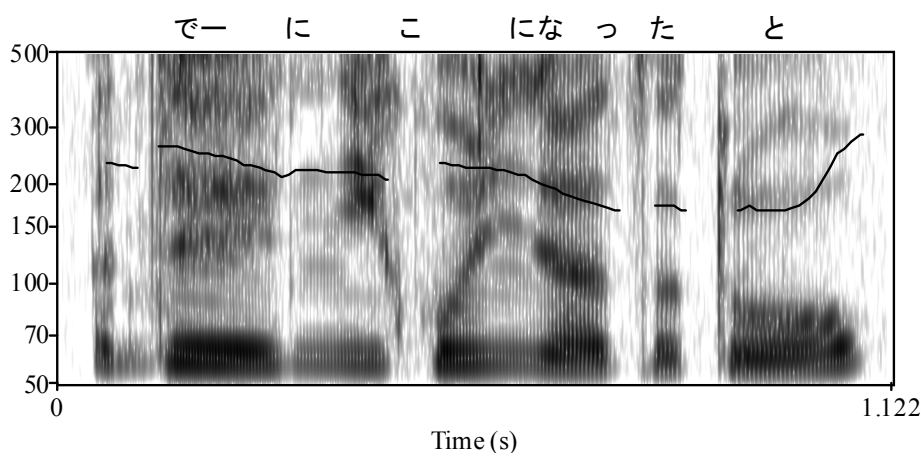


図 23 話者 FHE による「と」の音調

以上は、「ト」が文末にあって内部で上昇が見られる例であるが、「ト」が文末にあって低く付く例も見られた。図 24 は FHE による「今やってたんじゃないと？」という音声である。図 24 の発話は、以下のような文脈で行われたものである。談話の中で、「花さか爺さん」の内容を再生している途中、話者 FOE が「ま なんさま (とにかく) やってみようか」と言いだし、それに対し FHE が「今 やってんだんじゃないと？ (やってたんじゃないの?)」と聞いている。

話者 FOE：ま なんさま やってみよっか。あはは
 話者 FHE：あははは **今 やってたんじゃないと？**
 話者 FOE：あっ うそ、
 話者 FHE：はははははは

図中、冒頭の「い」が若干高く始まり、続く「ま」がやや低く続いている。後続の「や」も「ま」と同じ高さで続き、無声区間を挟んで「ん」まで概ね同じ高さで続いている。その後、「じゃ」の部分で下降が始まり緩やかに下降しながら「い」に至る。最後の「と」は前部要素に低く付き、さらに母音部分で下降が見られる。図 24 が先に挙げた図 22、図 23 の例と大きく異なるのは、同じ疑問でありながら、図 22、図 23 では文末で声の上昇が見られるのに対し、図 24 の例では声の下降が見られる点である。

これらの例から、文末の「と」は文末にあつて先行要素と一体になることもあり、先行要素に低く付いて独立した音調単位となる場合もあることが窺える。

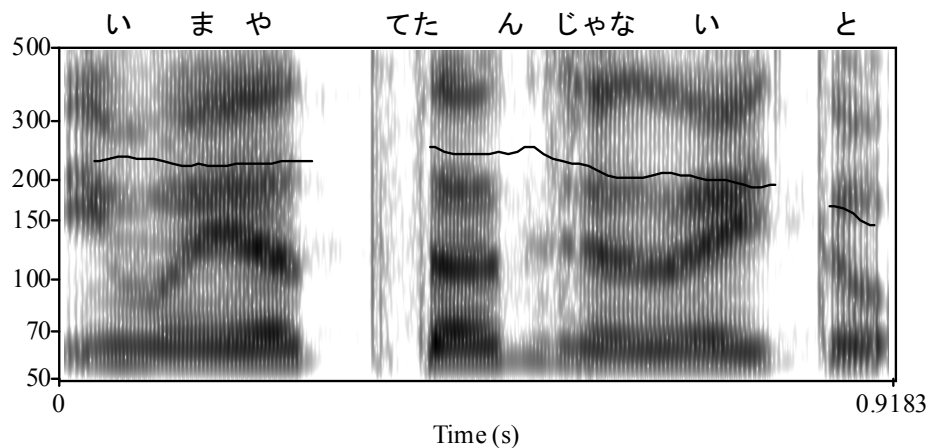


図 24 話者 FHE による「ト」の音調

3. 7. 5. 助動詞「タイ」の音調

以下、熊本方言の助動詞「タイ」の音調について例を挙げる。秋山（1988）では、熊本方言（肥筑方言）では、共通語文法での断定終止法（共通語文法）が存在しないに近いとし、その代わりとして断定辞（ダ・ジャ・ヤ）を零記号にして、タイ・バイ・ナー・ネーなどの終助詞によって終結することが基本の一つとなっているとしている。また、この「タイ」が零記号断定辞の代行として用いられた場合、「二+二ワ 四タイ」といえば算数計算の冷静な判断・断定の気持ちに近い表現になる」としている。本調査における、話者 5 人の談話音声でも「タイ」の使用が認められたが、話者ごと、或いは談話ごとに「タイ」の出現頻度には以下のように差が見られた。

話者 FHE	1 例 (ツタイ 1 例)
話者 FOM	7 例 (ツタイ 7 例)
話者 MTS (DB)	13 例 (ツタイ 9 例)
話者 FMK	5 例 (ツタイ 5 例)
話者 MBT	3 例 (ツタイ 2 例)
話者 MTS (DC)	0 例

男女に関わりなく、タイの使用が認められるが、用いられ方の違いも認められた。それは、女性の場合、「タイ」が単独で用いられた例はほとんど無く、「～つたい」という形式で使用される割合が多い。この「タイ」に先行する「ツ」であるが、秋山（1988）ではこの「ツ」は準体助詞であつて、「準体助詞ト・ツが、いわゆる吸着語となつて体言句的断定法になっている」としている。

図 25 から 28 に「タイ (ツタイ)」の音調を示す。図 25 は話者 FOM による発話で、「まだ 終わらんのか」つつって ゆって、したら「まだまだ」って ゆうつたい お札が。で その 間に この 子は **逃げとるつたい**。」の一部である。図を見ると、前半の「この子は」の部分は「こ」が高く始まり「は」にかけて F0 曲線の下降が見られる。後半の「逃げとるつたい」では、「に」が低く始まり、第 2 拍目の「げ」にかけて F0 が上昇し、第 4 拍目の「る」まで概ね平坦に続いている。その後の「つ」は母音が脱落し F0 値が抽出できていないが、最後に「タイ」が低く付いていることが窺える。

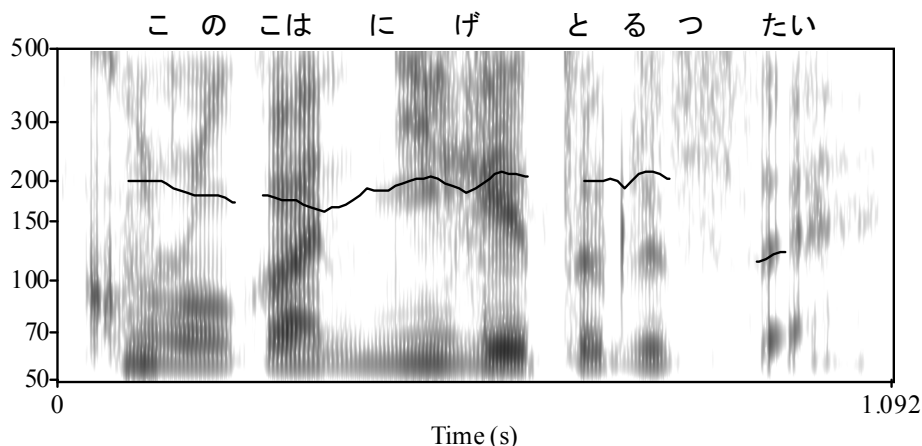


図 25 話者 FOM 「タイ」の例

また、図 26 は同じく話者 FOM による「したら この いい 爺ちゃんの ときには **花が 咲くつたい**」という音声の一部である。「花が」の部分は、第 1 拍目から高く始まり、第 3 拍目の助詞「が」にかけて緩やかな下降が見られる。その後の「咲くつたい」では、第 1 拍目の「さ」から第 2 拍目の「く」にかけて F0 曲線の上昇が見られる。後続する「つ」は母音が脱落しているため F0 は出ていないが、最後の「たい」の F0 曲線から「たい」が低く付いていることが分かる。以上から、「タイ」は前部要素に低くつき、独立した音調単位をなすことが窺える。

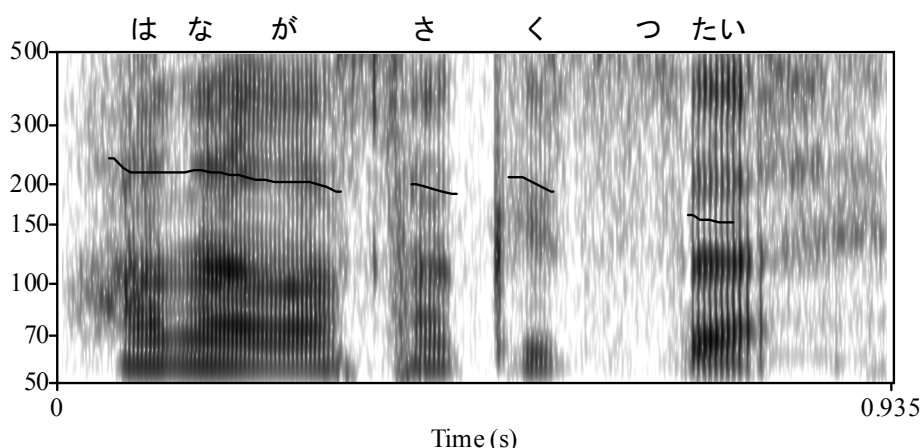


図 26 話者 FOM による「タイ」の音調

以上に挙げた音調は話者 FOM に限らず、その他の話者でも観察された。例として、男性話者 MTS の「タイ (ツタイ)」の例を示す。図 27 は「なんかね 『三枚のお札』は一、なんかきのう、ストーリー一 教えて、もらって一、なんか、あ、うちに一 あの一 **昔話の本あるつたい**」の一部ある。

第1拍目の「む」から第2拍目の「か」にかけてF0の上昇が見られるが、その後「る」までなだらかな曲線を描いている。ここでも「タイ」に先行する「つ」は無声化しているが、図から「タイ」が前部要素に低くついていることが分かる。

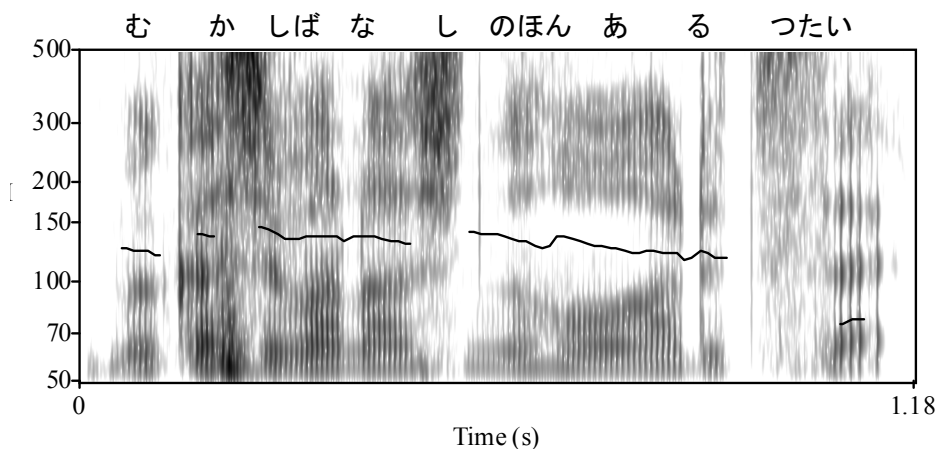


図 27 話者 MTS による「タイ」の音調

以上は「たい (つたい)」が単独で現れた例であったが、終助詞が後続しても「タイ」が低く付いている例が観察された。図 28 は、話者 FOM による「そこにおったのが実はやまんばだったつたい。でそれに**気づいたつたいね**」という発話である。第2拍目から第4拍目の「た」にかけてF0の上昇が見られ、「つ」を挟んで「タイ」が低く着き、「ね」がそのままの高さで続いている。同様の傾向は図 29 にも見られた。図 29 は話者 FMK による「でー、 えっとー、 あ **目が見えんつたいね**」という発話の一部である。第1拍目から第2拍目の「が」にかけてF0が上昇し、「が」から次の「み」にかけて下降する。その後の「えん」部分は平坦であり、「たい」が低く付き、「ね」がほとんど同じ高さで続いている。

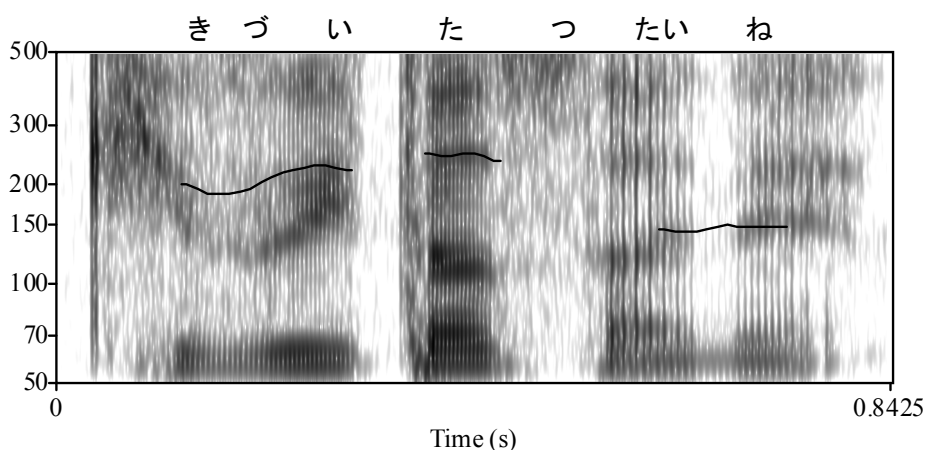


図 28 話者 FOM による「タイ」の音調

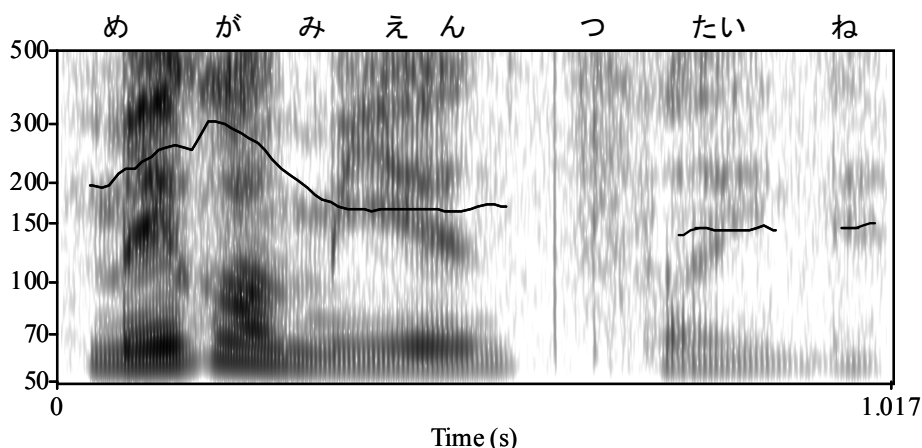


図 29 話者 FMK による「タイ」の音調

以上見たように、「タイ」は前部要素に低く付き、独立した音調単位を形成することが窺える。それは後に終助詞が付いた場合も同様である。ただし、「タイ」に終助詞が後続する場合は、単独で用いられた場合よりも前部要素に高めにつく傾向が見られた。

3. 7. 6. 終助詞「ヤ」の音調

続いて、「ヤ」の音調について検討する。本報告での分析では、話者 MTS の談話音声で 3 例、話者 FMK の談話音声で 1 例見られた。吉岡 (2002) では、熊本方言の疑問の終助詞として「～ナ」「～ト」「～ヤ」を挙げ、それぞれ丁寧さを基準として使い分けられているとしている。そして高年層の場合、「目上の聞き手に対しては「～ナ」を使い、目下に対しては「～ヤ」を使うという実態がある」とし、以上の 3 種の終助詞とイントネーションの組み合わせが、年代別に見て丁寧さの知覚にどのように影響しているかを検討している。ここで我々の談話音声を見てみると、図 30 は、談話 DB に現れた話者 MTS による「まじや」という音声である。この発話は以下のような場面で見られた。

MTS: あれ あれだっ 戻ったら意味なくない? あれ あの話 だってなんかさあ その人の外見
に 関係なく なんかねえ・・・

FMK: ま ほら 「そんな 野獣を一 好きになった 偉い 君には一 ご褒美だよー」チックな も
のじゃ?

MTS: ああ まじや。

FMK: わからんけど。

MTS: ああ。

FMK: 多分ね。

以上は、談話の中で「美女と野獣」という話の内容について言及している部分である。MTS は「美女と野獣」の内容について釈然としない気持ちがあったようで、その気持ちを話者 FMK に訴えている。それに対し、話者 FMK は自分の解釈を述べるが、依然として MTS は納得しかねる様子で言い放つように「マジや」と答えている。話者 MTS にとって話者 FMK は目下というわけではないが、気の置けない友人同士であるため、ぞんざいな話し方をしても許される関係であると考えられる。

「ヤ」の音調を見ると、冒頭の「ま」が低く始まってその後上昇し、「ヤ」でピークを迎えている。その後、「ヤ」の末尾で高さの下降が見られる。他の発話の「ヤ」を見ても前部要素に続いて「ヤ」内部で下降する音調しか見られない。以上から「ヤ」は前部要素と同じ高さで続き、内部で下降する音調を持つと考えられる。

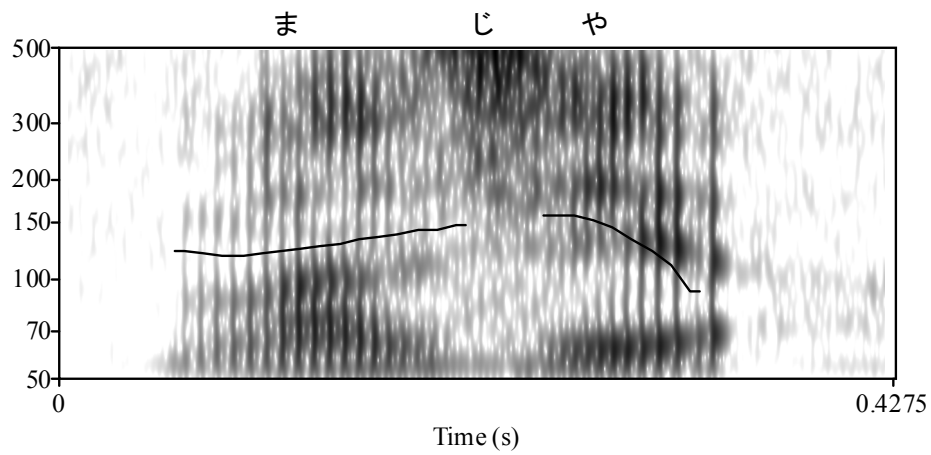


図 30 話者 MTS による「ヤ」の音調

第4節 まとめと今後の展望

以上の分析により、部分的ではあるが、熊本方言では基本的に語レベルで音調的な独立性を持ち、助詞や助動詞、終助詞においてもある程度固定した音調が見られることが窺えた。そして語レベルの音調の独立性は、それよりも大きな単位とするイントネーションに含まれることにより、希薄になることが示唆された。

はじめに述べたように、アクセントが無いとされる方言の音調の研究は、アクセントがある方言に比べて蓄積が少ないのが現状である。しかしながら本報告で対象とした熊本方言の音調については、近年具体的なデータに基づいた実証的研究が行われるようになり、音調規則の一端が明らかになりつつある。しかしそれらの研究の多くが、準備された共通語の文を方言に訳して発話した音声を対象としたものであり、談話の音声を対象としたものはほとんど見られない。研究者が用意した文を対象として研究を行うことには、調査項目が設定しやすい、他の言語との比較が容易になるなど多くの利点がある。しかし、そのような調査方法では、本報告で述べた「昇降調」のような、言わば「想定外」の事象に巡り合うことは難しいであろう。今後は本報告で得られた知見について、定量的な検証を行って行きたい。

参考文献

- 秋山正次（1988）「熊本県の方言」『講座方言学9—九州地方の方言—』，国書刊行会。
- 秋山正次・吉岡泰夫（1991）『暮らしに生きる 熊本の方言』，熊本日日新聞社。
- 井上史雄（1994）「尻上がりイントネーションの社会言語学」『国語論究第4集 現代語・方言の研究』，明治書院。
- 金田純平（2007）「句末昇降調について-現れ方と成り立ち-」，『シリーズ言語対照 1 音声文法の対照』，くろしお出版。
- 久木田恵（2002）「方言の表現・会話（談話）」『朝倉日本語講座 10 方言』，朝倉書店。
- 窪菌晴夫（1997）「アクセント・イントネーション構造と文法」『日本語音声 [2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』，三省堂。
- 郡史郎（1997）「日本語のイントネーション-型と機能-」，『日本語音声 [2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』，三省堂。
- 郡史郎（2006）「熊本市および周辺の非定型アクセント方言における語音調と音調句の形成」『音声研究』 10：2，43-60。
- 柴田武（1961）「日本語のアクセント」，『言語生活』 117号（『論集日本語研究2アクセント』所収）。
- 陣内正敬（1996）『地域語の生態シリーズ九州篇 地方中核都市方言の行方』，おうふう。
- 馬場良二（2005）「現代熊本市内方言話者の発話分析」，『熊本県立大学文学部紀要』 第11巻 第46号。
- 平山輝男（1937a）「九州方言に於けるアクセントの諸相」，『音声学協会会報』 45。
- 平山輝男（1937b）「九州アクセントとその境界線」，『音声の研究』 IV。
- 平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』，育英書院。
- 平山輝男（1951）『九州方言音調の研究』，学会之指針社。
- 前川喜久雄（1997）「アクセントとイントネーション」，『日本語音声 [1] 諸方言のアクセントとイントネーション』，三省堂。
- 前川喜久雄（1998）「音声学」，『岩波講座言語の科学 2 音声』，岩波書店。
- 山口幸洋（1998）『日本語方言一型アクセントの研究』，ひつじ書房。
- 山口幸洋（2002）『方言・アクセントの謎を追って』，悠飛社。
- 吉岡泰夫・都染直也（1993）「無型アクセント地域における文型イントネーション」『各地無型アクセント方言の韻律的特徴』 E2 班「各地無型アクセント方言の韻律的特徴と教育」研究課題番号 04207111 研究成果報告書，137-142。
- 吉岡泰夫（2002）「イントネーションの方言学」，『21世紀の方言学』，国書刊行会。